

昭和四十年度

財団法人

東洋文庫年報

東洋文庫

昭和40年度財団法人東洋文庫年報

正 誤 表

頁	誤	正
10頁 5行	P・ドウミエヴィル	P・ドウミエヴィユ
10頁 12行	W・T・デュ・バリイ	W・T・デ・バリイ
14頁 7行	ORTEUS	ORTELIUS
16頁 2行	DON RODRIGO	DON RODRIGO
20頁 12行	なかったに	なかったのに
22頁 12行	老へられ	考へられ
22頁 13行	prefsx	prefix
27頁 15行	襲 熊	熊 襲
39頁 4行	蘇州県尹山湖	蘇州長州県尹山湖
39頁 11行	田 頭	甲 頭
42頁 1行	租	税
53頁 11行	Balāhdurġ,	Balādhurî,
56頁 4行	族	旅
74頁 6行	裕	祐
80頁 7行	<i>Grud mtha'</i>	<i>Grub mtha'</i>
105頁 7行	民	氏
107頁 12行	知	和
112頁 4行	土	士

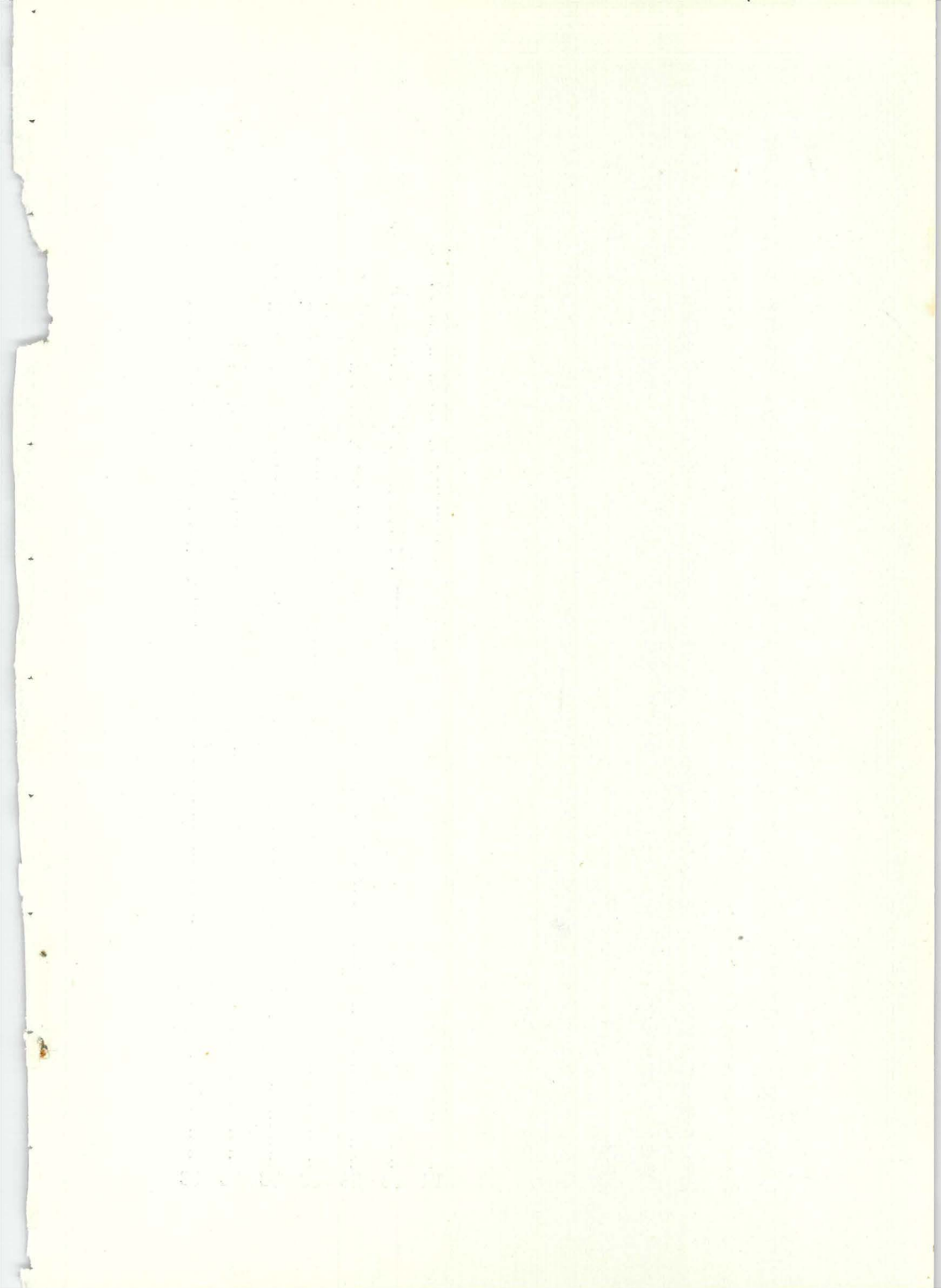
昭和四十年東洋文庫年報

目次

一	東洋学センターとしての東洋文庫	1
二	昭和四十年度に於ける東洋文庫	3
三	職員	6
四	事業	13
1	刊行図書	13
2	講演会(東洋学講座・特別講演会)	18
3	研究会(東洋文庫談話会)	55
4	展示会	56
5	情報連絡	57
6	図書の収集と閲覧	58
五	研究調査活動	68
1	東洋学連絡委員会	68
2	特定研究	69

3	機 関 研 究	71
4	総 合 研 究	72
5	各種研究委員会	73
	第一部 近代現代アジア研究	73
	近代中国研究委員会・近代中国研究センター	73
	第二部 東アジア研究	76
	東亜考古学	76
	古代史研究会	76
	敦煌文献研究委員会	76
	宋代史研究委員会	77
	明代史研究委員会	77
	第三部 満蒙・朝鮮研究	78
	清代史研究委員会及び鮮満関係史研究会	78
	第四部 中央アジア・イスラム・チベット研究	78
	中央アジア・イスラム研究委員会	79
	チベット研究委員会	79

第五部 南アジア・インド研究	82
南方史研究委員会	82
6 研究者養成	82
7 研究生報告概要	83
8 職員の研究業績	88
附(一) ユネスコ東アジア文化研究センター	98
(二) 東洋学術協会	111



一 東洋学センターとしての東洋文庫

東洋文庫は、大正六年（一九一七）、故岩崎久弥氏が中華民國總統府顧問ジョージ・アーネスト・モリソン氏の蔵書を購入して設けられた東洋学関係の専門研究図書館である。大正十三年（一九二四）に現在地に財団法人として設立せられてより今日まで、研究部・図書部・総務部を設け、(イ)アジア各地域の研究資料を網羅的に収集し、(ロ)東洋学の研究を推進すると共に全国の専門研究者に便宜を供与し、(ハ)各種の貴重な資料の複製を行い、重要な研究業績を出版し、(ニ)あわせて東洋学の普及事業と研究者の養成とに専念してきた。第二次大戦後の経済事情変動のため打撃を受けた東洋文庫は、昭和二十三年（一九四八）図書部が国立国会図書館支部となつて、その維持管理を受けることとなつたほか、更に民間学術研究機関補助金、外国よりの援助金が寄せられて、研究部の事業と組織体制とを整えてきた。

東洋文庫の特色は、専門図書館としての文献資料センターの機能と、総合的研究機関としての研究センターの機能及び国内的国際的研究情報センターとしての機能を兼ね具えている点にある。東洋文庫は、(イ)一般研究者に対し収集資料を公開し、民間機関としての自由な立場で運営されている。(ロ)一大学、研究機関個々では系統的収集の困難な資料に重点を置いて収集している。(ハ)海外及び地方在住研究者に対しても、マイクロフィルムによる資料複写サービスを行い、收藏せる貴重資料を覆刻して逐次刊行し学界に提供している。(ニ)一大学、一研究所の枠を越えた総合的研究体制を取つて、各大学、研究機関に跨る流動的共同研究、国際的協力研究を行つている。(ホ)国内・及び国際的研究情

報の交換、通信連絡の衝に当り、我が国の研究成果を広く海外に紹介している。(イ)我が国東洋学の成果を広く一般に普及し、来日せる海外のすぐれた東洋学者の講演を公開する場を提供し、また貴重な資料を展示する活動を行つてゐる。(ロ)東洋学の特殊な専門分野の研究者を養成し、各大学の大学院博士課程修了程度の人材に引続き数年間の研究の機会を与え、特に比較的未開拓な分野の研究を促進せしめている。人文社会科学の振興が叫ばれ、その方策として総合的研究センター乃至専門文献センターの設置、整備が唱えられつつあるとき、従来よりその方向を目指して活動してきた東洋文庫には、一層内外の期待がかけられている。

二 昭和四十年度における東洋文庫

本年度において最も特筆すべき出来事は、東洋文庫理事・同図書部長・国立国会図書館支部東洋文庫長岩井大慧博士が昭和四十年十一月一日付を以つて退職され、後任に辻直四郎博士をお迎えしたことである。岩井博士は、大正八年から大正十三年まで非常勤の嘱託としてモリソン文庫に勤務し、大正十三年モリソン文庫が財団法人東洋文庫に発展するとともに、その専任職員として勤務、以来本年まで四十年勤続せられた。その間、昭和十四年十一月に主事、昭和二十三年主事制度廃止とともに図書部長に任じ、同時に国立国会図書館支部東洋文庫長を兼ね、さらに昭和三十五年東洋文庫の理事に就任、故和田清理事等とともに文庫の経営に当られた。就中、戦事中、東洋文庫の図書を宮城県下に疎開し、空襲下の文庫を護り、戦後は疎開図書の返送に筆舌に尽し難い苦心をせられ、終戦後数年は文庫内に起居して文庫の再建に挺身せられた。その功績は、東洋文庫のみならず、日本の東洋学史上に永く光彩を放つものである。新任の辻直四郎博士は、日本におけるインド学イラン学の泰斗として国際的に知られた学者で、東京大学名誉教授・学士院会員であるほか、いくつかの国内及び国際学会や研究機構の推進に重要な役割を果たして来られた。昭和三十五年東洋文庫の一部として東アジア文化研究センターが設けられると、博士は特に請われてその所長に任じ、兼ねて東洋文庫理事として文庫全体の経営に参画されることになった。博士はその専門の学に精しいばかりでなく、自ら称してビブリオグラフィアーといわれるほど書誌のことに明るく、その蔵書はインド学イラン学に関する限り、古今

を網羅し、門類つぶさに備り、海内に匹儔すべきもの有るを聞かない。しかも博士は、東京大学の文学部長・教養学部長・東洋文化研究所長をいづれも数年に互つて歴任し、学術機関の運営者としても非凡の才幹を示めされた。国会図書館は立法の府に属するため、その職員が他の行政機関に職を兼ねることを許さない。そのため、博士は文部大臣顧問を辞し、日本ユネスコ国内委員会副委員長をやめ、文庫の経営に力を専らにされることになった。博士のこの熱意は、再建の途上にある東洋文庫に限りない希望を与えるものである。

さて昭和四十年度における東洋文庫の一般事業は、前年に引続き、文部省大学芸術局を通じて日本政府から、またハーヴァード・エンチン研究所から、東洋文庫維持会から、補助金並びに援助金を受けて行われた。

文部省補助金による事業は、チベット特別調査研究（三ヶ年継続、第二年度三五〇万円）を含む各種研究室の一般調査研究や、「東洋文庫欧文紀要第二十五」の編集、東洋文庫論叢第四十八中村拓著「鎖国前に南蛮人の作れる日本地図」1の刊行、講演会・研究会・展示会の開催、図書資料の収集などが行われた。講演会は京都大学名誉教授梅原末治氏以下十一氏によつて、研究会はロンドン大学教授D・トウイチェット、国立台湾大学図書館典藏股長曹永和氏を含む十三氏によつて行われた。展示会は十一月六・七日中央アジアイスラム圖研究委員会の担当により「イスラーム学文献及び中央アジア旅行記」の展示が行われた。図書資料の収集は、単行本和漢書一〇三五冊洋書二七五冊計一三一〇冊、逐次刊行物と漢書六八三冊洋書三三五冊計一〇一八冊が購入され、また国内国外の諸研究機関から、単行本和漢書九三〇冊洋書五九二冊計一五二冊、逐次刊行物と漢書二〇四四冊洋書一〇一〇冊計三〇五四冊の交換寄贈を受けた。

特別事業としては、前年度に引続き、文部省科学研究費交付金によるアジアアフリカ地域特定研究の一として、「イスラム諸国の社会構造の研究」(最終年度)による文献資料の蒐集が行われ、同総合研究は「宋代以降の中国農村社会経済語彙の研究」(代表者青山定雄)が第二年度に入り、また同機関研究「地方志にもとづく中国社会の研究」(三ヶ年、代表者田川孝三)が開始された。フォード財団援助金による「二十世紀中国とその背景に関する研究」は第四年度に入った。

また文部省学術局情報図書館課の援助の下に「梅原考古資料目録 朝鮮之部」が刊行され、ハーヴァード・エンチン研究所の援助によつて、「八旗通志列伝索引」が刊行され、石田幹之助著「東洋史叢考」と「特殊文庫マイクロフィルム綜合目録」の編集が行われた。また東洋学文献センター連絡協議会は、文部省出版助成金によつて、東洋文庫ほか六つの機関に収蔵される漢籍叢書の所在目録を刊行した。

本年度の研究を養成は、文部省補助金及びハーヴァード・エンチン研究所補助金等によるもの計五名である。また日本学術振興会流動研究員として、神戸大学助教岩見宏氏を迎えた。

最後に特筆すべきことは、茨城県古河市河口信広氏より江戸時代の南蛮蘭方医学関係図書一三三部二五四冊を、弘前市御幸町八ノ三藤田本太郎氏より清代文集類七〇部六一五冊を、前図書部長岩井大慧氏より蔵書三一八部六一〇冊を京都大学名誉教授梅原末治氏より蔵書一七〇〇部一九〇〇冊を寄贈せられたことである。目下閲覧に供すべく整理を急いでいる。

三 職 員

理 事 会 理 事 長 細 川 護 立

(文化財保護委員会委員)

専 務 理 事 榎 一 雄

(財団法人東洋文庫研究部長 東京大学教授)

理 事 有 光 次 郎

(株式会社吾婦製鋼所取締役会長)

岩 井 大 慧

(駒沢大学教授)

小笠原 光 雄

(株式会社三菱銀行相談役)

大 原 総 一 郎

(倉敷レイヨン株式会社社長)

川 北 禎 一

(株式会社日本興業銀行会長)

酒 井 杏 之 助

(株式会社第一銀行相談役)

辻 直 四 郎

(国立国会図書館支部東洋文庫長 日本学士院会員 東京大学名誉

教授)

徳 川 宗 敬

(社団法人日本博物館協会々長 日本図書館協会顧問)

松 方 三 郎

(株式会社国際テレビフィルム社長)

松 本 重 治

(財団法人国際文化会館理事長)

山 本 達 郎

(東京大学教授)

評議員会

監事
評議員

岡東 浩 (東山農事株式会社常務取締役)

磯野 長藏 (株式会社明治屋会長)

梅原 末治 (京都大学名誉教授)

奥田 東 (京都大学総長)

大河内 一男 (東京大学総長)

大浜 信泉 (早稲田大学総長)

小泉 信三 (日本学士院会員)

河野 六郎 (東京教育大学教授)

新村 出 (日本学士院会員 京都大学名誉教授)

高垣 寅次郎 (日本學術振興會理事長)

高橋 竜太郎 (協和醗酵工業株式会社取締役)

永沢 邦男 (慶応義塾大学塾長)

俣野 健輔 (飯野海運株式会社々長)

総務部

部長
参事
助手

小林 吟重郎

平野 豊

黒崎 尚子

松前 義治

鈴木 千代子 田口 幸子

図書部

部長
司書

辻直四郎

宇都木 章 森岡 康 渡辺 兼庸

司書補

田川孝三
大塚祐子

(昭和四十一年三月退職 東京大学講師兼任研究員)
竹之内 信子 秩父 良子 広瀬 洋子

研究部

部長
研究顧問

谷治嘉紀
榎一雄
岩井大慧
岩村忍

(京都大学人文科学研究所教授)

技能員

山下久代
竹内サクノ
山口正敏

一瀬 美恵子(昭和四十年十月退職)
(昭和四十一年一月退職)
(昭和四十一年二月退職)

作業員

兎野 寿満子
石井 浜吉

池田直人 熊田 信次郎 小林 輝男
野田 春枝(昭和四十年十月十五日退職)
臼倉 豊松 勝間 勇次郎 染谷 コウ

梅原末治
辻直四郎

東洋学連絡委員会委員

原田 淑人
(日本学士院会員)

村田 治郎
(京都大学名誉教授)

山本 達郎

岩井 大慧

板野 長八
(広島大学教授)

岩生 成一
(法政大学教授)

江上 波夫
(東京大学東洋文化研究所教授)

榎 一雄

貝塚 茂樹
(京都大学人文科学研究所教授)

鈴木 俊
(中央大学教授)

塚本 善隆
(京都国立博物館長)

辻 直四郎

長尾 雅人
(京都大学教授)

仁井田 陞
(東京大学名誉教授)

福井 康順
(早稲田大学教授)

松本 信広
(慶応義塾大学教授)

宮崎市定 (京都大学教授)

森鹿三 (京都大学人文科学研究所教授)

山本達郎

吉川幸次郎 (京都大学教授)

名誉研究員

P・ドゥミエヴィル (フランス学士院会員 前コレージュ・ド・フランス教授)

S・エリセイエフ (ソルボンヌ大学教授 前ハーヴァード・エンチン研究所々長)

W・フックス (ケルン大学教授)

B・カルルグレン (前スウェーデン王立極東古代博物館長)

E・O・ライシャウアー (ハーヴァード大学教授)

W・サイモン (英国学士院会員 前ロンドン大学教授)

G・トウツチ (ローマ大学教授 イタリア中東亜研究所長)

W・T・デュ・バリイ (コロンビア大学教授)

A・フォン・ガベイン (ハンプルク大学教授)

研究員 菊池英夫 (昭和四十一年三月退職 山梨大学助教授兼任研究員)

研究員(兼任) 青山定雄 (中央大学教授)

荒松雄 (東京大学東洋文化研究所助教授)

市古宙三
(お茶の水女子大学教授)

岩生成一
梅原末治
神田信夫

(明治大学教授)

北村甫

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授)

河野六郎

佐伯富

(京都大学教授)

末松保和

(学習院大学教授)

鈴木俊

周藤吉之

(東京大学教授)

関野雄

(東京大学東洋文化研究所助教授)

田中正俊

(横浜市立大学助教授)

鳥海靖

(東京大学講師)

中嶋敏

(東京教育大学教授)

藤枝晃

(京都大学人文科学研究所助教授)

松本信広

松村 潤

(日本大学助教授)

三根谷 徹

(東京大学助教授)

護 雅夫

(東京大学助教授)

山根 幸夫

(東京女子大学教授)

山本 達郎

研究生

山口 瑞鳳 山崎 元一

岡田 英弘

(昭和四十一年三月退職 東京外国語大学アジア・アフリカ

言語文化研究所助教授 兼任研究員)

鶴見 尚弘

(昭和四十一年三月退職 山梨県立女子短期大学助教授 兼任研究員)

助手

荒川 裕子

国岡 妙子 白川 邦子 二瓶 幸子

双川 俊江

本庄 比佐子

遠藤 純子

(昭和四十年十二月退職)

四 事 業

1 刊 行 図 書

○中村拓著「鎖国前に南蛮人の作れる日本地図」(I) 東洋文庫論叢第四十八 B 4 判二三四頁、挿図五六、昭和四一年三月

目 次

序

凡 例

目 次

表 目 次

挿図目次

序 説

第一章 「MERCATOR 型」の日本図

一 地名の出典

二 日本の位置と地形

三 琉 球

四 葡萄牙人の極東進出当初の小琉球

第二章 「DIOGO HOMEM 型」の日本図

第一項 日本の主群島

一 「DIOGO HOMEM 型」日本図に就いての諸家の

見解

二 日本の主軸の方向

三 日本図採用の証跡、「DIOGO HOMEM 型」の三

種、蝦夷

四 マルコ・ポーロの“Zipangu”の残骸

五 朝鮮の地形の誕生、朝鮮と九州との相対的位置
六 「Diogo Homem 型」の地図に於ける日本の地名

第二項 「Diogo Homem 型」に於ける南西諸島

- 一 現行行政地域概見
 - 二 沓岐、対島、朝鮮を結ぶ線上の群島
 - 三 「Diogo Homem 型」に現わるる “doino” の三種、その附近の島々
 - 四 沖縄主島
 - 五 “Dos Reis magos ”
 - 六 “Sta Maria ” 及びその附近の島々
- ## 第三項 南蛮地図の功罪
- 一 南西諸島の地図に就いての南蛮人の貢献
 - 二 地名の北方への移動
 - 三 琉球と Mariana 群島との混同
 - 四 同一地形に対する異なる地名の流用

第三章 「Ortelius 型」の日本図

- 一 「Ortelius 型」の日本図に於ける地形
- 二 Ortelius の地図と Velho の地図との比較

三 「Ortelius 型」の日本図の原拠

四 歐洲に伝えられたる行基図

五 「Ortelius 型」の日本図に於ける地名

六 南西諸島、宝七島の初見

第四章 「Dourado 型」の日本図

第一項 日本主島

- 一 この型の本州南東半島に対する諸家の見解
- 二 “Cabo dos Sestos ” の地形は葡萄牙航海家の実地の知見によるか
- 三 “Cabo dos Sestos ” は「潮ノ岬」か
- 四 「Dourado 型」に於ける行基図の因子
- 五 南蛮人、シナ人、倭人等の海商

- A 南蛮人の渡来に関する歐洲側文獻
- B 南浦文之の「鉄炮記」
- C 十六世紀半ばの倭寇
- D 明の「倭情哨探」
- E 鄭若曾の「日本国図」
- F 薛俊の「日本地理図」
- G 「日本考略」図と「Dourado 型」日本図と
の地形の類似並びに年代の一致
- H 南蛮人の行基図採用の仕方
- 六 葡萄牙地図の西班牙、和蘭への流出
- 七 葡萄牙製図中に西班牙及びシナ知見の増補
- 八 朝鮮の地形の改良とその出典
- 九 J. MARTINES によるシナ図の採択
- 十 外国人の誤写に基づく「Dourado 型」の変型
- 十一 ORTELIUS の “Maris Pacifici” 中の「銀
島」
- 十二 LINSCHOTEN の極東図は LASSO の作にあらず
- 十三 「Dourado 型」とその後のものの移行型
- 第二項 「Dourado 型」に於ける地名
- 第三項 「Dourado 型」に於ける南西諸島
- 一 九州北西方群島
- 二 度島、女島を結ぶ線上の群島
- 三 九州西岸の島々
- 四 種子、屋久、永良部等九州南岸の島々
- 五 口ノ三島
- 六 宝七島
- 七 所謂 “Javea”
- 八 琉球の地形に及ぼせる Velho の影響
- 九 “Dos Reis magos”
- 十 「Dourado 型」図に於ける台湾の地形
- 第五章 「Diogo HOMEM 型」と「Dourado 型」との
南西諸島の比較

一 両者の独立性

二 使用せられたる地理学的材料

第六章 十七世紀初頭に日本に渡来せる航海家の使用せる航海図

一 航海図

一 WILLIAM ADAMS の使用せる航海図

結語

二 所謂 WILLIAM ADAMS の日本地図

○梅原考古資料 朝鮮之部 東洋学術協会編 A 4判 四三七頁 昭和四十一年三月

梅原末治博士が多年にわたつて蒐集された考古学資料（遺跡遺物調査の記録、実測図、見取図、拓本、写真、および野帖）のうち朝鮮半島に関するものの目録である。これ等資料は東洋文庫に寄贈され、一般図書と同様の手続きで閲覧及び複写利用に供している。

○八旗通志列伝索引 東洋文庫満文老檔研究会編 B 5判 二〇六頁 昭和四〇年十二月

八旗通志は前後二度にわたつて編纂刊刻され、まず乾隆四年に満文および漢文本の八旗通志初集が刊刻された。ついでこの修訂増補が行われ嘉慶四年に漢文本の欽定八旗通志が刊行された。この二種の八旗通志の列伝や人物志は、それぞれ四五千人の伝を収め、これほど多数の旗人の伝を集めたものは他にみられない。しかもこれは史料価値の高い三朝実録をはじめ冊誥、諭祭諭葬文、家乗など独自の材料にもとづいているので、清朝史の研究に欠くことが出来ない。ところでこの両種は『三十三種清代伝記綜合引得』にも採用されておらず、その利用にはこれが索引の編纂

三 JOHN SARIS の使用せる航海図

四 DON RODRIGO DE VIVERO Y VELASCO の使用せる航海図

五 SEBASTIAN VIZCAINO の使用せる航海図

が要求されていた。満文老檔研究会は満文老檔の訳註に併行して八旗通志初集の列伝並びに欽定八旗通志人物志の索引を作成したが今回これを整理して印刷した次第である。なお神田信夫、松村潤、岡田英弘の三名が担当した。

○漢籍叢書所在目録 東洋学文献センター連絡協議会編 B5判 四三頁

東洋文庫、東京大学東洋文化研究所、京都大学人文科学研究所、国立国会図書館、内閣文庫、静嘉堂文庫、天理図書館に所蔵される漢籍叢書の目録で、上記各機関に於いて作製された目録原稿を東洋文庫図書館において取りまとめたものである。

○東洋文庫近代中国研究室欧文図書目録Ⅱ 近代中国研究センター編 B5判 四四頁 一九六五年五月

○東洋文庫近代中国研究室邦文図書目録Ⅱ 近代中国研究センター編 B5判 一六五頁 一九六五年十月

○東洋文庫近代中国研究室中文図書目録Ⅱ 近代中国研究センター編 B5判 七八頁 一九六五年十一月

○中国関係日本文雑誌論説記事目録Ⅱ 近代中国研究センター編 B5判 二四四頁 一九六五年六月

○近代中国研究センター彙報第六 B5判 三三頁 一九六五年四月

宮下忠雄 中国農村人民公社管見

吉田金一 モスクワとレニングラードの図書館管見

市古宙三 近刊辛亥革命史料紹介

○東洋文庫年報（昭和三十九年度） A5判 一二二頁 昭和四十年十二月

2 講演会

昭和四十年東洋学講座

春期

第一八六回 五月十二日

「耶馬台国問題についての考古学上の所見」

京都大学名誉教授

梅原末治

第一八七回 五月十九日

「白鳥博士の広く知られていない諸研究——白鳥博士生誕百年を迎えて」 国学院大学教授

石田幹之助

第一八八回 五月二十六日

「古代インドの占術」

東京大学名誉教授

辻直四郎

第一八九回 六月二日

「西夏語・西夏文字研究の新段階」

京都大学助教授

西田龍雄

第一九〇回 六月九日

「越南訴訟法の性格——『国朝勘訟条例』の一考察——」

東京大学教授

山本達郎

第一九一回 六月十六日

「宋代浙西地方の水利と圍田問題——土地所有制について——」

東京大学教授

周藤吉之

秋期

第一九二回 十月十三日

「ウマル二世の土地政策」

第一九三回 十月二十日

「イランの今昔」

第一九四回 十月二十七日

「チャガタイハン国史の一・二の問題」

第一九五回 十一月十日

「カザンハンの改革—イランのモンゴル政権の性格に就いて」

第一九六回 十一月十七日

「ジハード（聖戦）について」

特別講演会 昭和四十年十月十六日

「内藤博士と考古学の諸研究—白鳥先生誕生百年に因んで—」

講演要旨

白鳥先生の広く知られていない諸研究

白鳥先生は西域史や塞外民族の歴史、満鮮の歴史地理などの研究家として広く世に知られ、その方面の業績は続々

中央大学教授 嶋田 襄平

東海大学教授 足利 惇氏

新潟大学名誉教授 植村 清二

北海道大学教授 本田 實信

慶応義塾大学助教授 遠峰 四郎

京都大学名誉教授 梅原 末治

石田 幹之助

発表せられ学界周知の事であるから今夕は割愛し、玆には余り一般に知られていない方面の研究に就いて少しお話しをして見たい。尤もこれらは先生自ら筆を執つて公表してをられないものが多く、断片的に教室や東洋文庫へ毎週二度来られた際、私の部屋などで話して行かれた事が主であるから、今となつてはもう一度お尋ねもし、質しても見たい所が沢山あるがそれは出来ない。これはどこまでも私一個の開書きに止るものであつて、私の誤解や覚え違ひも少くない事であらう。若し先生に疊を及ぼすやうな事があつてはならぬと十分注意はした積りであるが、行届かぬ所は一に私の責任である。

先生の広く知られていない研究の一つは、日本語の特色とその系統とに關するものである。これは古くから先生の関心事の一つであつて、早くから長編の論文も発表せられているが（「国語と外国語との比較研究」二・三・五・六・八・九「史学雑誌」第十六編十八号、明治三十八年十二月）「日・韓・アイヌ三国語の数詞に就いて」（三・明治四十二年一月三月）を公表された頃からと思はれるが、先生は研究の進展に伴ひ百八十度の転回を試みられ、全く別の新説を立てられるに至つたのであるが、世間はそれを知らず、依然として先生が旧説を維持してをられるかに考へ、旧説を引いて之を批判した人もあるくらゐで先づ之を正しておく必要を感じず。尤もこれは先生自らがそれを明瞭に宣言せられなかつたに由来するからかも知れないが、兎に角遺憾千万な事であつた。即ち先生は初のうちには多くの諸家と同様に先づ語彙の外国語との比較を試みられ、何か日本語と近縁のある言葉を求めようとされたらしいが、明治の末から大正の初期にかけ日本語は他の外国語と殆ど親近關係のない、少くも近隣の諸国語と親縁のない一種特別なものであつて、謂はば一つの *Sprachinseld* をなしている。若しどこかの言葉と類縁が認められるとしてもそれは余程古い時代、タイム・インメモリアムの時代にそれから分

れてしまつた言葉で、その後に別様の發達を遂げてしまつたものであり、さういふことがあつたとしてもそれは何万年かの昔のことであり、この国土で日本語といふものが形成せられたのは古い古い悠久の昔であつたといふのが先生のお考へであつたやうである。世間ではシNTAXの上でアルタイ語との類似が屢々指摘せられ、特にラ行音が語頭に來ないことなどがよく唱へられたが、さういふ点もあるが音韻の上からは南方の諸語とも關係が迹づけられ得るし、またパレオアジアティック民族の或るものの言葉とも類縁を求められないこともない。然し第一語彙の点で借入語を除けば何語とも親近關係を樹立することが出來ないといふのであり、この点も先生の力説せられた所で、晩年に公にされた「日本語の系統——特に數詞に就いて」(昭和十一年)などにはその点が既に強調せられている。

かやうな立場から論ぜられた日本語の特色の一つは日本語では母音を一寸變へただけで語彙を豊富にして行くといふ事がある。yami(暗)から yomi(夜見の国の yomi) yomo-tu-ikusa(黄泉ッ軍)の yomo' isi(石)から iso(磯) ka(香)と ki(氣)、また母音が變つただけで意味の變らないものもある(例 ugnisu, oguyusu(鶯) takubusuma, tikubusuma(竹生島))。〔先生は現在の日本語をローマ字に写す際は俗に云うヘボン式を採用され ti, tu, si などは決して使用されなかつたが、古語を写す時は便宜上 ti, du, si などを使はれた。これは必しも古音が tu, du, si 等だつたと云ふわけではない。或はさう思はれたかも知れないが、そこははつきり確かめておかなかつた。またハ行の古音を p- で現はされたが、すべてが p 音であつたと認めてをられたかどうか、これも明かではない。〕また語彙を豊かにするために、日本語には prefix が非常によく發達し、五十音圖の各行各列に亘つて機械的に語幹に附着し、意義は變らないでヴォキャブラリーが殖えて行くといふ特色がある。nuru(寝る) i-nuru' yuku(行く) i-yuku' yo(夜)

sa-yo' ma-padaka (ま裸) su-padaka (十裸) pasamu (挟む) ta-basamu の類である。darui (疲る) や pi-darui, ke-darui も同様な例である。これらの sa-ma-su-ta-には本来実質的意味はなかつたが ma-padaka, su-padaka に真裸・素裸の字を充つ、ta-basamu に手挟む、sa-yo に小夜の字を充てるやうになつて少し意味を強めるやうになつたかも知れないが本来は單なるプレフィックスの添加であつた。i-ne (稲) yo-ne (米) si-ne (稻) ta-ne (種) sa-ne (実) ko-me (米) など皆同一の言葉である。それでは tumu (積む) tanu (溜む)蓄む) tomu (當む) neru (練る) pi-neru (捻る) tu-neru (抓る) ko-neru (捏る)なども同例と見て差支ないかと同つたら御返事はイエスであつたかノーであつたか確かには覚えなすがまづイエスであつたかと思はれる。

プレフィックスが二つ(或はそれ以上)加はることもあるとて padukasi (恥づ) に対して u-ra-padukasi を挙げられた。これは当然 ra-padukasi であるべきなれど、ラ行音が語頭に立つことのない日本語であるために更に u-を加へて u-ra-padukasi となつたものである。それを ura に何か実質的意義があるかに考へ、「うら」に「心」という義があつたのだとする如きは全く賛成出来ない。また「たましひ」(魂=tamasipi)などは「玉」と聯繫して老へられ勝ちだが実は最後の pi が語幹で pi 或は bi は神秘的生産力などを意味し、古典に産靈などと書いてあるのがそれだが、之に ma-su という複合 prefix が加わり、更に ta-なる prefix が添へられたものに外ならない。この事などは「大秦国の木難珠と印度の如意珠」(西域史研究)下、昭和八年)にも見えてゐたと思ふ。——それからここで述べるのは些か所を得ないかも知れないが、先生は語原の少し面倒な問題になると兎角外国語を引合ひに出すのは考へもので、その前にもう少し研究して見る必要があるとよく戒められた。嘗てバカ(馬鹿・莫迦)の語原

が学界で問題になつた時、先生は baka は bokeru, to-bokeru ta-wake, bakeru と関係があり、決して外国語などではないと教へられた。

先生はまた国語に於ける敬語の原義に関し屢々自説を述べられた。これは明治三十九年頃「史学雑誌」に載せられ説と大正の初期に公にされた我が古伝説に見えるわに（和邇）に就いたなどとの間にどれ程の変化があるか否かまだ十分調べてないが、私が大学へ入つてから以後の（大正の初）お説を述べて見たい。敬称の一つに *wa* というのがあり、畏敬すべきものといふ原義があり、これに種々な prefix が添つて複雑になつたといふので、*ti-ti*（父）はその好例であり、これが *te-te* となり、*to-to* となつたのは第二綴が前の綴の母音に同化した形である。*oro-ti*（大蛇）、*midu-ti*（蛟）、*ika-tu-ti*（雷）、*kagu-tu-ti*（迦具槌、火の神）の如きもその例である。大國主の命を一名 *opo-na-muti* と唱へるのも同断であり、八岐大蛇の話に出て来る手名槌・足撫槌も槌は宛て字で *-tu-ti* の義であり、竜を「たつ」（辰）というのも *ta-tu* の第二の *tu* は *wa* の変化したものである。かの因幡の兎の皮を剥いた「わに」を *sabi-mo-ti* の神と称するのは、之を畏るべき神物として尊称し *wa* を加へたものである。

別の敬語としては *ni-ne* の類があり、*a-ni*（兄）*a-ne*（姉）はその証で、かの「わに」は *wa-ni* であり、「鬼」を *o-ni* というのも、畏るべきものとして敬称を使用したものと思われる。先生はこの外にも血縁関係の稱謂を色々説かれたが今明瞭には記憶してゐないので茲には省くが、「をとこ」（男）「をみな」（女）の原義をその性器の別称（今では卑称俗称になつてゐるが、初めからさうであつたか否かは分らない）から導かれたのは敬聴すべき考説であつた。

ところで私が最も興味を覚えたのは盟神探湯の話を読した時お聴きた話である。これは大正の初めでそれ以後先生が親しく筆を執られなかつた考説であり、私が「史学雜誌」(二六編第四号)に不完全な講演要旨を載せただけのようであるからこの機会にもう少しその要点を敷衍しておきたい。それは或る感覚を現はす語に同一語根から派生したその両極端を現はす語を以てするといふ一事であつた。即ち *pi* は「火」であると共に「氷」であり、*po* (火)、*ponopo* (炎)、*poteru* (ほてる) が一方から出るに對し他方 *pi-same* (氷雨) *pi-muro* (氷室) が出る。丁度これは *yakedo* (火傷) に對し *simo-yake* (霜焼) *yuki-yake* (雪焼) があり、*kogeru* (焦る) *kogasu* (焦がす) *kuga* (探湯の「くが」) *kagayaku* (輝く) の *kaga* に對し *kogoyu* (凍る) *koporu* (氷る) が出る。これと同じやうなことは「水」(*midu*) は *du* または *tu* が語根で *tumetasi* (冷る) *iteru* (凍る) が出るが一方 *atui* (熱い) や *atataka* (暖) が派生する。これは支那語で * *liet* が「冽」であると同時に「烈」であるのと似た例であり、人間の *psychology* にはどこが共通な点があるものと云はれた。

それから数詞に就いては先生生前既に岩波の講座「東洋思潮」にも書いてをられ、更に之を單行本とされたものや東洋文庫の欧文紀要にも載せてをられるから茲に繰返すことをしないが、未開民族が「一つ」を知つてから「二つ」を知るまでには余程の歳月を要する事が明かにされてゐるし、「二つ」を知つてから *2+1* の意味で「三つ」を知るまでにはこれ亦多大の年月を要することが知られてゐる。それなのに国語では *momo* (百) *hi* (千) *yorodu* (万) が皆純日本語であつて基本形の *mu* (六) *to* (十) *ya* (八) から分派したもので、同一国語で斯かる大数をも唱へたといふ事實は如何に悠久の年月を日本語が閲してゐるかを如実に物語るものである。これに關聯して助詞の「も」

「よ」「と」がやはり数詞の根柢になつてゐる言葉から分派したもので、いづれも「あれもこれも」「これとあれと」「これより多く」とかいうやうに、more, mehr の意を持つものであるといふのも先生の御意見であつた。

次に物の名からその働きを導き出す derivation の一種の型がある。即ち te (手) から toru (取る) tataku (敲く) が出、asi (足) からは wasiru (足る) が出、me (目) から miru (見る) が出、kata (肩) から katugnu (担ぐ) が出、kui (口) から kataru (語) が出るやうなもので、語彙は全く違ふがハンガリー語にも斯ういふ型があり、ヴァーンベリーが早く既に注意してゐる。このやうな立場から言葉の語原を指摘せられたことが一再ならずあつて、私どもはその創見に常に感嘆したものであつた。例へば「南」は menomo (目の面) であるとか「北」は kata (肩) から来てゐるとか (cf. 支那語「北—背」)、「東」(aduma) は asa-tu-ma (朝の方)、「出雲」(idumo) は yutumo (夕の方) の類である (この点琉球方言の「東」(agari 太陽の上の方)「西」(iri 太陽の入る方)と比較すべきである)、「冬」は piyu (冷ゆる季節)「夏」は na-atu (熱い季節) もその一例であつた。

語原に就いてはいつもかういふことを云はれた。上田万年・松井簡治両博士の「日本国語大辞典」が出る前に著者たちから語原を挿入すべきか否かに就いて相談を受けた時に、先生は「大言海」の如きは洵に立派な辞典であるが、ただ語原の点では全く失格で、十中八九は Volksetymologie の域を出でない。それというのも日本語の一語一語の語根 (root) が十分に研究されておらず、殆ど一々が分つてゐないからだ。外国語と比較する際にも root と root との対比を試みるのは意義があるが、こちらの prefix や suffix などと先方の root と比較したり、またその逆をやつたりするのはナンセンスといふものだと言つて語原挿入を避けるべしと進言せられ、それが採用されてあの四巻

の大辞典には極めて明瞭なものの外は語原は省かれてゐる。

言語のことはこのくらゐにして日本の神話や太古史の解釈に就いてお聞きしたことを少し述べて見よう。「記」「紀」の本文批評や神話と史実との關係に就いては津田博士が早く本を書いてその説を公にしてしまはれたので、世間ではその方の見解は津田博士に始まるやうに考へられ勝ちだが、津田さんは学生時代から先生の門に出入し、常に「記」「紀」の神話などの問題を討論しあつてをられたとのことで、「記」「紀」のどこを見ても日本民族の由来などは書いてありはしない、これは人類学・考古学・言語学などの面から別途に考察すべきもので「神は人なり」流の新井白石風の見方、乃至エウヘメリズム的な古い考え方が弘まつてゐるのは遺憾であると云はれ、民族の由来などに就いては明治四十二・三年の頃学習院で同僚であられた大森金五郎氏の「国史概説」の中にその一端が引用されて世間の一部には既に知られてゐたが、当時大陸とか南方の島嶼とかに本源地を求めるのが常識のやうになつていた際とて寧ろシヨックを感じたものであつた。先生が大和にその中心を置いた皇室の祖先は非常に古いもので、決して西紀前何世紀といふやうな新しい時代に九州などから入り込んだものではない。西に大阪湾、東に伊勢湾、北に若狭湾を擁して一大勢力を発揮した大和朝廷の起原はかなり古いもので、それより前は恐らく瀬戸海辺の海に近い部落でもあつたらう、それがギリシアの小都市のやうに地の利を得、文明發達の原則に従つて段々勢が強くなつて行つたのだらうがそれは今日からは到底分らない。少くも古代日本語が成立した時代には嚮に挙げた「東」^{あづま}「出雲」^{いづも}の語義の如く大和地方からこの両地方を指称したものであることがよく之を証明している、云々のお話であつた。

それから先生は繰返し太古以来この国土には異民族としてはアイヌが東北地方に拠つてゐただけで、出雲民族とか

熊襲民族とかいふやうなものの居つたことを信ずるなどは全くナンセンスなことだと云はれ、従つて出雲神話などといふ語を意味のないものと云はれ、大国主命が出雲を治めてをられたなどといふのは神話の世界を史実として解したものであり、この命は現シ国魂ノ命とも呼ばれた如く、この現シ国の精であり、高天ケ原と根ノ国（夜見ノ国）との中間に在る、葦原ノ中ノ国の靈魂であり、どこか或る地域を統治してをられたなどと解すべきものではないと強調せられた。これは私のウロ覚えかも知れないが或る時先生は少し大胆な説かも知れないが、昔は日本の原住民はアイヌだつたやうに信じられた時代があつたが今はそれも廢れてゐるが、どうも色々な点から見てアイヌは日本人より後からこの島の東北に入つて来たものではないかと云はれたやうに思ふ。（これは京都大学の人類学者足立文太郎教授の高説と併せ考ふべきものと思はれる）、話は元へ戻るが大国主命が實際出雲に居られたものならば高天原に居られる天孫との間に予め平和裡に国譲りの約束が出来たわけだから、瓊々杵の命は当然出雲にお降りになり、現シ国の統治權を受継がるべきであるのに拘はらず、所もあらうに強暴なる熊襲の本拠なる襲の高千穂の峰にお降りになり、さうして九州の南端の辺陲の地に三代居られて一応この中ノ国を支配されたといふに至つては到底史実としては考へられぬことである。これには「記」「紀」神話を体系化した作者の側に、或はその奥に横たはる朝廷の有力者の考へ方に、皇室の尊嚴や仁慈の徳を物語化する意図があつての事であつたとし、その経緯を東大の或る学会で話されたことがある。即ち嘗ての反抗勢であつても帰順して大和の治下に来れば元は彼等も皇室と同族であるといふ事に話を持つて行つてしまつてある。「記」に出雲タケル・襲熊タケル・日本タケルの三者が現はれて来るが、これはそれぞれ一個の人物を指したのではなく、神話体系化の直前に最後まで政治的・軍事的に中央に反抗した山陰と九州との勢力と中

央の勢力とを象徴したものであるといふ事もそれに關聯して説かれたものであつた。

先生は日本神話を解釈されるに方つても実に用意周到なもので、国学者たちの見解は勿論、海外の神話学者・フークロアの学者・宗教学者などの定評ある書物や考説をよく渉獵せられ、立論に遺漏なきを期せられた。例へばフレーザーの大著などは各種ともよく目を通してをられたし、ハートランドの『The Legend of Perseus』三巻の如きは特に愛読されたようで、いつも書庫から出して机の上に並べておられた。私が特に驚いたのは諸冊二神が天の浮橋に立つて天の沼鉾で下界の海をコウロコウロと掻き廻はされた時、その滴りが凝つて淡路島となつたといふ僅か三十分ばかりの話されるのに「あれが日本の臍に當る」といふ伝への解釈のために A. B. Cook の Zeus といふ、その時まだ第一巻しか出ていなかったが数百ページの一大厚冊を、それも一ページに本文が二行か三行であとは細字の註ばかりびつしり組んだような難物を Omphalos (臍) という一語のためによく読破せられたことであつて、これには驚嘆もし敬服もしたのであつた。

こういう話をするともまだいくらでもあるが、格別珍奇な雑誌や学報に出たものではないのに、どういふわけか一向専門学者の引照しないもの二三を挙げてこの講演を終る事としたい。その一つは「民族」一ノ三(大正十五年)に載つた「本邦の鷹匠伝説起原に就いて」は独り鷹匠起原の伝説及び鷹狩一般に就いてのみではなく(鷹狩一般に就いては新村出博士が詳論されたことがあり、昔ハンマープルクシタールの專書もあるし、我国の記録を集めたものに旧宮内省所編の「放鷹」もあるが)満洲の名産たる「海東青」(shonkor) のことに就いても詳論せられたものであるが、私の茲に紹介したいのは之に附説せられた百濟から応神帝の時に王仁・阿知岐なる学者が来朝した事、南支那から呉織・

綾(漢)織即ち織工を献じた事などは皆後世に作られたフィクションである事などがそれであつて、その名儀に稽へ、また大陸や半島の形勢に徴してそんな事の実としてあるべき筈のないことを論証されたものである。即ち前者は阿知岐師(小博士)の意で日本の不満を買つたから王仁吉師(大博士の意)を遣はして日本の満足を得たとのことであり、後者は当時日本と敵対關係に在つた高句麗の好意によつて呉の国からその国の名工のみならず、その敵国たる北支那の工人を献じて来たといふなどはいづれも架空譚に過ぎざることを論ぜられたものであつた。次には「民族学研究」四ノ三(昭和十三年)に出た「土蜘蛛伝説に就いて」であり、土蜘蛛のみならず国栖・佐伯・長脛彦・蝦夷等の名義を考へられた論文であるが、これらが皇師に逆らつた「国ツ神」といふのは異民族でも何でもなく、みな架空の物語りで実在の或る部族などではなくて、例へば土蜘蛛のクモは熊襲のクマと同じで獣の熊と同じく獍猛な、powerfulなという義であるが之に土蜘蛛の文字を宛てたものだから後には昆虫の如く思はれたのであるし、佐伯の *sapegi* は「言騒ぐ」の「騒ぐ(*sapagu*)」と同様何かと言挙げして騒がしいものの意、蝦夷を *emisi* 或は *imiji* と云ふのは「いみじく強い」ものの意でこれから *ebisu* (夷・胡)の語が派生するといふ事を明かにせられたが、説の当否は別問題として一向に世間の注意を惹かずにあるのは洵に惜しむべき事であると思ふ。

それからもう一つ余り人が問題にしないやうに思はれるのは支那の数詞の構造に関する説で、これはその輪郭をサツヂェストされただけで到々先生自ら筆を執つて一考を草されずにしまつたから己むを得ないかも知れないが、池内宏博士の要点の筆記に拠ると大体かうである。「東洋学報」一ノ一、編末に梧影と署名してあるのは池内博士の筆名である)。支那の数詞は *quinary system* で専ら数える時の指の形を視覚に訴へて作られたものらしいと云はれ、

一 (古音 *kat 二(後に説く)三(sam) 四(si) 五(ngo)
九(kiu) 八(pat) 十(sit) 六(iok) 十(sip)

であるが、このうち片手の五指の形を基本とする時は「一」と「九」、「二」と「七」とは容易に対応を指摘すべく、「四」も同語系の諸民族では le, lya 等 l- の音に始まるもの多く、現に西夏語では「四」を「勒」というのと比較して「四」「六」の關係を推し得べく、また「二」は ɬ で一見「八」と関連がないかに見えるが、もし「二」の義ありと思はれる「倍」(*pai)と置き換へれば「八」(pat)との關係を推定し得られよう。さうして「一」「八」「七」「六」が入声音であるに對し「二」「三」「四」が然らざるは兩者を區別するためであつたかと思はれる云々と述べられた。この抄録はここで止り、「五」や「十」に就いては何も記しておらず、また「百」「千」等の大数に就いて聞く所を得なかつたが、これはほんの序論であるにしても容易ならざる卓見と思つた。

なおこの外にも朝鮮の諺文の字形に関する創見があるが、これは昭和十五年頃「訓民正音」と共に發布せられた書物が彼の地で發見せられ、彼の地の學者によつて周到に検討せられたより十年ばかり前に先生によつて創唱せられ、朝鮮民族の世界に誇るべき一大發明で、決して他國語の既成字形を真似たものでないといふことの先鞭を着けられ事などを述べておきたいが時間もないこととてこの辺でこの疏末な講演を打切ることにする。

古代インドの占術

古来インドには種々の占術が發達し、専門書も多く作られた。全般にわたつて説明することはできないから、資料を広義のヴェーダ文献に限り、主として前兆について述べることにする。しかし本論に入る前に、この範圍に属しな

辻 直四郎

い若干の占術に触れておく。

後世のインドで非常な発達をとげたものに占星術がある。これはホーラーまたはジャータカと呼ばれ、誕生時における天体の状況から、人間の運勢を占うことである。その充実した形においては、元来インド起原のものでなく、メソポタミア文明に本源をもち、四世紀の中葉ギリシャから伝わったといわれる。術語がギリシャ語に基づく点からも首肯される。ただしアタルヴァ・ヴェーダには確かに誕生時の星座と禍福との関係を問題とした個所がある（六・一〇、讃歌の使用を規定するカウシカ・スートラ四六・二五参照）ヴェーダ文献の最新層に属するヴァイカーナサ・グリフヤ・スートラは、出産に際し遊星の位置を確かめて、嬰兒の運勢を占えと述べている（二・一四：p. 46, 13—14）。これにより占星術の萌芽は、インド自体にも存在したことが知られる。

狭義のヴェーダの中には見当らないが、籤引きに似た方法で未来の運命を占う好例が一群のグリフヤ・スートラに残っている。身心の特徴によつて花嫁の適否を定め難い場合、或いは決定を一層確実にするため、数個の土団子を作り、候補者たる女子にその一個を選ばせる。土団子を構成している土壌或いはその中に隠された土壌の性質により吉凶を占う。土団子の数は文献によつて異なり、四個ないし九個に及んでいる。次に簡明な一例をとり、土壌を採取した場所と、それを選んだ場合の結果とを示す。一、二毛作地——子孫は食物に富む。二、牛舎——家畜に富む。三、祭壇——敬虔の栄光に満ちる。四、乾くことなき池——一切に充足する。五、賭博場——博奕に耽る。六、十字路——諸方に放浪する。七、不毛地——穀物を欠く。八、墓地——夫を殺す。（アーシュヴァラーヤナ・グリフヤ・スートラ一・五・四——五による。）

王室の司祭官プローヒタは、出陣等のため前兆の判断に通曉する必要があつた。王家の興亡、世界の存廃は、惑星の様相に依存するからである（ヤージュニャヴァルキヤ・スムリティ一・三〇七参照）。バラモン教が認容する占術者に比し、單なる市井の売卜者の社会的地位は甚だ低くかつたに違いない。マヌ・スムリティによれば、占術者は収賄者・偽瞞者・賭博者等と共に、罰せられるべき者の中に数えられ（九・二五八）、占星をもつて家計を立てる者は、祭式および祖靈祭に招かれないバラモンの中に挙げられている（三・一六二）。公認の呪法を施行する者とバラモン教の統制に服しない妖術者との間に見られる相違が、占術においても認められる。

占術一般に関して述べたいことは多々あるが、今はこれを割愛し、以下もつぱら吉兆の前兆について記する。前兆を意味する最も普通のサンスクリット語はアドブタ (adbhuta) である。その語源には異説があつて確定しないが、希有・未曾有と訳される。ニミッタ (nimitta) およびウトパータ (upata) も前兆を表わすが、三語の間に明瞭な区別は認められない。ただウトパータは自然の有様と異なる状態、即ち異変を意味し、ニミッタに対して凶兆を指す場合が多い。前兆はしばしば天・空・地の三界に配当されるが、一定の神格に由来するものとして分類されることもある。その種類は多種多様で、自然現象（例えば流星・旋風・地震）、日常事（例えば器物の破損）から、特定の鳥獸の出現、超自然事（例えば神像に起る異変、血の雨）に及ぶ。同一の現象もその起る季節に従つて吉兆ともなり凶兆ともなる。後世の文献によれば、人間の貪慾・不正・不信仰・不道德・宗教的義務の過怠などが、原因として挙げられ、前兆はこれに対する神怒、警告と解される。恐るべき結果を避けるためには、それぞれ特定の贖罪法が規定されている。

鳥や獣はしばしば前兆と認められるが、古代インドで最も忌まれたのは鳩である。リグ・ヴェーダの中で、鳩は破壊の女神ニルリティおよび死の神ヤマの使者とされ、翼もつ矢と呼ばれ、鳩が炉の灰の中に足跡をつけることを恐れた。このほか梟の声も凶兆とされた。(一〇・一六五。アタルヴァ・ヴェーダ四・二七——二九参照。) 鳩・梟のほか、不吉の鳥として「黒い鳥」が挙げられる。普通は鳥と解釈されるが、異論があつて確定できない。アタルヴァ・ヴェーダは「黒い鳥による汚れを払うための呪文」をもっている(七・六四)。

危険な魔術者は種々な鳥や獣の姿をとるといわれる(リグ・ヴェーダ七・一〇四・二二)。その中には梟・禿鷹・犬などが入っているが、リグ・ヴェーダが特に不吉視したのは驢馬である(一・二九・三)。アタルヴァ・ヴェーダは他の前兆と共に野獣の不吉な道切りを挙げている。「眠りてもし悪夢を見るとき、もし野獣が不吉の道を走るとき、くさめより、鳥の不吉の鳴声より、この護符は(汝を)守るべし」(一〇・三・六)。後の文献はくさめばかりでなく、あくび・瞼の痙攣・耳鳴り・咳をも警戒すべき前兆の中に数えている。しかしここでは上記の詩節に見える悪夢を取りあげることとする。

夢は現実以上の現実と考えられていたから、前兆として重要な役割をもつ。リグ・ヴェーダがすでに悪夢の具体例として、黄金の飾りを身につけること、花環を身につけることを挙げているのは注目に値する(八・四七・一五)。何故黄金の装身具を着用する夢が不吉なのかは明白でない。恐らく怖るべき神ルドラを連想した結果かと考えられる。花環を纏う夢を凶兆としたのは、屠殺場へ送られる獣を赤い花環で飾つた慣習に由来したものと思われる。同様にアタルヴァ・ヴェーダもしばしば悪夢について述べているが、一般に悪夢を逐い払つて敵のもとに送るという思想

が強く現われている（例えば六・四六）。なおリグ・ヴェーダ以来、悪夢をトリタ・アープトヤという神に引渡すように願われ、この神は一切の悪夢を無害にする特性をもつと信じられていた。悪夢に対する防衛手段としては種々方法が伝えられている。カウシカ・スートラは、悪夢を見たとき、アタルヴァ・ヴェーダの讃歌（六・四六）を唱えて顔を拭えと教え、特に恐ろしい夢を見たときは、特定の供物を捧げるように規定している。また「われは悪夢より、不吉なる夢より、破滅より身を轉ず」で始まる讃歌（七・一〇〇）を唱えて、寝返りをうつことも有効とされる。もし夢の中で食物を食べたときは、「われもし夢に食物を食らい、翌朝その得られざるとき」で始まる讃歌（七・一〇一）を唱えて、身辺を見廻わせと規定されている（以上カウシカ・スートラ四六・九——一三）。けだし夢に物を食べることは本来吉兆であり、目覚めて後その食物が得られないときのみ、不吉と考えられたらしく、それに備えた咒法なのである。

夢は死の前兆となることもある。リグ・ヴェーダに属する二種のアーラヌヤカに詳しく説かれているから、その主なものを挙げることにする。黒い歯をもつ黒い人に夢で殺されるとき、黄色或いは黒い婦人が髪を振り乱しまたは髪を剃るのを見るとき、野猪や猿に殺される夢を見るとき、突風に吹き飛ばされるとき、黄金を嚙んで飲み込むとき、蜂蜜を食べるとき、（白い）蓮華を一本もつとき、驢馬・野猪の牽く車や駱駝に乗って行くとき、赤い花環をつけ黒い仔牛を伴う黒い牝牛に運ばれて南方（＝死の方角）へ赴くとき、紅花で染めた衣服を着るときなどである。（以上アイタレーヤ・アーラヌヤカ三・二・四、シャーンカーヤナ・アーラヌヤカ一一・四による。）

もちろん死の前兆は夢ばかりに限られない。覚醒時に白昼夢のように現われ、或いは現実の見聞の形を取ることも

ある。前出の文献は次のような現象を死の前兆として挙げている。太陽が月のように見え、光線が消失し、天が青色に見えるとき、太陽が穴だらけに見える、自身の影が穴だらけに見えるとき、頭が鳥の巢の臭気を発するとき、鏡や水に映る影の頭が曲がり或いは頭を欠くとき、両眼を閉じても瞼の裏にちらつくものの見えないとき、両耳を塞いでも火の燃える音・車の軌るような音の聞えないとき、火が孔雀の頸のように青く見えるとき、雲のないのに稲妻を見、雲のあるのに稲妻を見ないとき、大地があたかも燃えたつように見えるとき、現世に愉悦を失い幽鬱に感じるときなどである（以上アイタレーヤ・アーラヌヤカ三・二・四、シャーンカーヤナ・アーラヌヤカ三・七、一一・三による。）

このほか広義のヴェーダ文献に含まれる前兆の種類は多数にのぼる。二千年以上も前の通俗信仰を反映し、その若干は現在にいたるまで一般民衆の生活に触れこんでいる。しかしここでは最後に、最も奇怪と思われることが、極めて普通に起り得る事柄と同列に置かれている一例を挙げるに止める。すでに引用したカウシカ・スートラを始めとし、これと同種の文献に見る神像異変に関する前兆である。神像が笑い、泣き、歌い、語り、歎息するとき、動き、走り倒れ、起き上がり、坐り、踊り、破裂し、発汗し、瞼を開閉するとき、手にもつ劔や旗を投げ棄てるとき、自然に炎上し、火・水・煙・油・血・乳などを吐き出すとき、国王の死または国の滅亡の予告であり、悪疫流行の前兆と解される。

宋代浙西地方の水利と围田問題

— 土地所有制について —

周 藤 吉 之

北宋では浙西地方特に蘇州・常州・秀州等で水害が多く起つたので、これを解決しようとして「水学」が起つた。この「水学」はこの地方を縦横に走っている浦や塘即ちクリークを開浚して、その堤岸を高くすると共に、围田を構築して、水害を防止しようとするものであつた。これは北宋中期の人で蘇州崑山県の郝宣とその子儒および常州宜興県の人单鏐等によつて唱えられた。北宋末の趙霖も浙西路で水利政策を実施したので、この地方の水利を論じている。そこでこれらについて述べると、郝宣は蘇州の水利を論じて、低地と高地とに分け、低地は太湖の水が松江に流出して海に注ぐ地方であつて、松江を南北にして縦浦、更にそれらの浦を東西にして横塘等のクリークが網の目のように走っている処であり、高地は揚子江や海に沿うた地方であつて、縦浦がこれらの江海に注ぐ処であつた。そして低地では水害があり、高地では旱害が起るといつて、それぞれの対策を論じている。尤もこの中、低地は多くて税額も重く、高地は少くて税額も軽いため、郝宣も自然低地の水害防止について多く述べている。郝宣によると、古はこの地方の縦浦や横塘は広くて深く、それらの堤岸は高く厚くて、浦塘は圩田の形をなしていたが、宋代になつて浦・塘の制が壊れて、圩田の形が崩れたため、水害が起つてきたといつてゐる。このことは崑山県の多くの富戸がこの頃にも围岸(圩岸)を築いて、田围の中にいて、围の外の水が田舎よりも高くなつても、水害を受けていないことから証明立てられるとしてゐる。そこで郝宣は古の縦浦・横塘の遺跡を求めて、これらを復置し、そこで掘つた土でもつて、浦塘の堤岸を高く厚くすると共に、围田を行わせ、更に積極的にこの地方の湖や瀆・蕩の沼沢において围岸を築

いて围田を成し、これによつて租税の増収をも図ろうとした。又、高地では古の堰門や斗門が壊れたため、旱害が起つたので、これらを復置すると共に、浦港を浚治しようとした。そこで王安石は鄴宣を浙西提舉興修水利に任じて、この説を実施させた。然し鄴宣はこの説を実行するために、五年間に二千万夫を用いて、浦塘四千里を修築させようとしたので、人民の強い反対に遇い、遂にこれは実施されるには至らなかつた。ただこの説は後世にまで大きな影響を与えたようである。

単陂は蘇州だけでなく、常州・秀州等の水利をも論じている。彼は蘇州呉江県の長堤が、太湖の東流の水勢を妨げるので水害が起つてきたとし、そこに木橋を建ててその水を通泄させると共に、諸堰瀆を浚えさせて、積水を決泄した後に、围田を行うべきであるといつてゐる。又鄴宣も常州・蘇州・秀州の水利を広く論じて、元符年間の水害では風濤の害が甚しかつたので、諸浦・堰を浚えると共に、围田を行つてこれらの害を防止し、更に瀆・蕩等の浅い処では圩田を構築して、税を増して国用を助けるべきであるといつてゐる。北宋末の趙霖も蘇州の水利を述べて、諸浦を浚えて閘（水門）を置き、圩田を築いて風濤を防ぐように行つてゐる。そして趙霖もここで富戸が圩田を行つて水害を免れている事実をあげており、彼は官がこのような圩岸を築くべきであると論じてゐる。趙霖はここで諸浦の浚治を行つたが、それは一江・五港浦等に過ぎなかつた。以上のように北宋では水害が多く起つたが、富戸は围田を行つていて、一般の民田が災害を受けても、これを免れていた。そこで南宋では富戸や官戸形勢戸は围田を行つて水害を防ぐと共に、積極的に湖・瀆・蕩等に围田を構築して、土地の開発を行うこととなつたのである。

南宋から元に亘つて、围田は鎮江府・常州・江陰軍・平江府（蘇州）・湖州・秀州（嘉興府）・臨安府等に行われ、

その中でも平江府・湖州・秀州華亭県（元代の松江府）で最も多く成されていた。これらの囲田は一般に大きな工費を要したので、多く有力の家がこれを行い、大きな頃畝のものが多かった。然し一般農民の零細なものも多く見えてゐる。これらの囲田は一畝、二畝というように数えられた。そして囲田は一般に圩田ともいわれ、「埭」ともいわれた。これらの諸府州県の中、南宋末に秀州華亭県で経界法が実施されたときには、田・地・蕩は皆囲毎に登記されて囲簿が作成され、囲簿に基づいて保簿、更に郷簿や県の都簿が作られた。その内容を見ると、某字囲毎に田・地・蕩が記入されていて、これから後にはこの某字囲がこの地方の郷村の一区劃を形成するに至つた。このように秀州華亭県では囲田が頗る発達していた。

そのような南宋の囲田の発達は、主に武将や官戸形勢戸等によつて行われた。南宋初期には武将が太湖の周辺に埭田（壩田）を築いたため、一般の民田は太湖の水利に沾わなくなつた。その後官戸形勢戸は陂湖を強占して囲田を成し、それらの囲田は各地に徧く存在し、湖・蕩等は多く囲田となつたため、一般の民田は水害ばかりでなく、旱害をも受けるようになった。そこで南宋も屢々その禁止令を出し、乾道二年の如きはそれらの囲田を開掘させた。その中には武将張子蓋の四塘の囲田周囲約二十里や長安の囲田周囲約四十里のように大きな囲田も含まれていた。然し浙西路の囲田はその後盛んに行われていて、淳熙十三年には澱山湖の北の山門溜に築かれた豪民の囲田が、水利を妨げていたので開掘された。然し澱山湖の囲田はその後も王室や寺院によつて行われていた。慶元二年には官戸形勢戸の囲田のため、民田が災害を受けるので、これらを禁止し、増囲・新創したものは開掘させた。然るに開禧二年、南宋が金と戦うと、淮南の民が多く浙西に流徙してきたため、元の囲田を復させて、これらの淮民をして租種させた。これか

ら豪民、巨室は再び大いに墾田を行った。南宋から元代にかけては澱山湖の墾田が大に行われ、華亭県（松江府）海隅郷の曹夢炎はここで九十三畝・数万畝をもっており、元朝の燕鉄木兒はここに埭田五百頃をもっていた。

北宋末から南宋に至る武將や官戸形勢戸の墾田は、土地が集中化していて、莊園をなしていた。例えば、武將韓世忠は蘇州の陳滿塘千二百畝を賜給され、張俊は蘇州吳山湖を墾裏した尹山莊をもっていた。南宋中期の人衛涇のいうところによると、浙西の豪強富室のもっていた墾田には、莊園が置かれて、佃戸が聚居していた。南宋では商人にも墾沢を買って墾田として、富贍を致すものがあつた。寺院の莊園の中にも墾田が存在していた。又學田の中にも大きな莊園が多くあつた。即ち慶元二年の頃、平江府府學の崑山縣全吳郷五保にある盛家蕩の千四百畝と墾田千畝は官莊をなしており、同じく朱塘郷三保・五保には蕩田千四百畝あつて、始め租百二十石を納めていたらしいが、南宋末には余剩田が出て、更に租百二十石を増収した。又平江府常熟縣雙鳳郷四十二都の器字蕩には千六百九十畝あり、初めには九十畝しか墾裏されていなかったが、南宋末にはこれらは皆墾田となり、この外に余剩田四百六十九畝が出て、それらは莊園を構成し、或は田頭によつて管理されていた。

南宋末には諸王府の莊園や宮中の奉宸御莊もこの地方に多く置かれており、それらも墾田であつたようである。南宋末元初の人方回のいうところによると、浙西には歳入二十万石・十万石・五万石などの大土地所有があり、方回は秀州の魏塘の王文政郎の家から望むと、その周辺の一帯には佃戸ばかりが住んでいた。そして佃戸は自分の分け前の中から自家の食糧を除いて、その余米を持つて市場にいつて、香燭・油・塩・麩麵・菓餌等と交換していた。これを見ると、ここでも官戸形勢戸は莊園をもっており、この地方から考えて、それらには墾田が多かつたであろう。又佃

戸は租を納める外、その余米を食糧として留めて、その他の米を持つていつて日用品と交換しているの、これらの荘園内の佃戸には必ずしも貨幣経済が浸透していたとはいえないようである。

従来浙西地方では土地の零細化が重要視されて、このような開田による土地の集中化が軽視されていたが、以上のように宋代の浙西路では、官戸形勢戸・武將・商人・寺院・宮中・諸王等によつて開田が行われて、それらでは土地が集中化されて、荘園をなしていた。これは学田でも見られるところである。

これらの開田では一般の佃戸の生活は苦しく、春に耕作するときから、地主に質入して、米を借りていて、自分で開岸を修築する余力はなく、婦女子が木杵でもつて多少開岸を修理する程度であつた。従つてこの地方では、大水が出でて風濤に浸されると、一年の收穫を失うことが多かつた。そして佃戸は一般に地主から種子・食糧を借りていて、負債をもちかえていた。そこで南宋から元に至つては、開岸の修理には慣習として地主が錢米を出し、佃戸が力を出すことになつていた。これは陂塘の修理の場合と同じであつた。ただこのように佃戸が力を出して、水利の負担をも行つていたことは、当時の租契には記載されていなかった。これは慣習上佃戸は拒むことはできないから、一種の強制になつていたと思われる。

ウマル二世の土地政策

イスラムの土地政策に関する問題は、つねにサワード（南イラクの沖積平野）のそれを中心として展開され、した

嶋田襄平

がつて私がここに述べるところも、サワードの土地政策問題が中心となる。ウマル二世（在位七一七—七二〇年）の土地政策を明らかにするためには、ウマル一世（在位六三四—六四四年）に始まるイスラムの土地政策から論じなければならぬが、ウマル一世の土地政策の要点は、征服地を征服軍に分配させることなく、それを従来通り原住民に耕作させて、それから租税を徴収することにあつた。租税はマホメットがすでにアラビア半島で徴収した人頭税と、アラブがサワードの沃野ではじめて知つた地租とからなるが、農村での租税の徴収は村落単位の一括徴収が行なわれていたため、人頭税と地租とは併せて一本で徴収され、したがつて用語の上でも実際上も、人頭税と地租とは明確に区別されることがなかつた。人頭税をジズヤ、地租をハラージュとよぶのは後世の法理論家の用語であつて、行政アラビア語においては、人頭税と地租とを併せて一本としたものをジズヤとよぶのが普通のことであつた。

我々は正統カリフ（六三二—六六一年）およびウマイヤ朝（六六一—七五〇年）をアラブ帝国とよぶが、それはこの時代の国家の性格が、本質的にアラブの異民族支配にあつたからである。したがつてアラブの地主が、僅かに生産額の十分の一にしか当らないウシュルを課せられ、しかも事実上それをほとんど支払わなかつのに対して、アラブ以外の民族でムスリム（イスラム教徒）となつたマワリーは、非イスラム教徒のジンミーとともに、収穫のほぼ半分に達したと推定される地租を課せられ、ムスリムの平等の原則はまだ確立されていなかった。農民のマワリーが重い租税負担を免れる道はただ一つ、農村を去つて都市に移住することだけであり、このような現象はムフタルの乱（六八五—六八七年）においてとくに顕著となつた。マワリーの都市集中は一方で都市の社会不安の原因となるとともに、他方農村の疲病と租税収入の減少を招いたため、イラク総督ハッジャージュはマワリーを強制的に帰農さ

せ、彼等に従来と同じ高率の租を支払わせた。その結果マワリーの不満は高まり、ウマイヤ朝政府は真剣にマワリー問題と取り組まざるをえなくなつた。ウマル二世がカリフの位についたのは、まさにこのような時点においてであつた。

ウマル二世の直面した課題はマワリーの不満をなだめることであつたが、しかしその解決のために国庫収入の減少を招くことは許されず、また彼がアラブ帝国のカリフである以上、それまでアラブの享受していた特権を全面的に否定できなかったところに、ウマル二世の苦心が存したのである。かつてこの問題を研究したギブ教授は、ウマル二世が各地の総督に書き送つた勅令を分析して、そこにマワリーからジズヤを免除するという規定のないことと、農村に留まるマワリーに、どのような租税が課せられるかの規定のないことに疑問をいだき、要するにウマル二世の政策はファイの土地を所有するものから、彼がジンミーであろうとムスリムであろうと、従来と同じ完全な土地税を徴収することにあつたという結論を下した。この結論は全体として極めて正しいが、法理論家の残した文献との比較において、なお論すべき点もないではない。以下に私見の要点を列挙してみよう。

(一) ウマル二世の勅令は、私のいわゆる行政アラビア語に属する。行政アラビア語におけるジズヤという言葉は、人頭税と地租とを併せて一本としたものをさしている。したがつて行政アラビア語でジズヤの免除といえ、一切の租税の免除を意味するのであつて、ウマル二世の勅令にこのような規定のないのは当然のことである。

(二) ウマル二世はジンミーのイスラムへの改宗の自由を保証し、このようにしてマワリーとなつたものに対しては、アラブのムスリムと同じ権利と義務とを認めた。このことはそれまでのアラブ帝国の政策の大修正を意味する

が、これを租税の面から考察した法理論家は、マワーリーからジズヤ（人頭税）が免除されたと主張する。アラブのムスリムとマワーリーとが同じ義務を課せられるという根本原則に立つ限り、このような法理論家の解釈はすこぶる妥当である。少なくとも用語上の問題に関しては、それまで区別されることのなかったジズヤ（人頭税）とハラージュ（地租）とが、ここではじめて明確に区別されることとなつた。しかしそれは法理論上の問題であつて、ウマル二世が実際に行なつたことではない。

(三) マワーリーから人頭税を免除すれば、それは同時に国庫収入の減少をもたらす。ウマル二世が実際に行なつたことは、ジンミーが改宗してマワーリーとなつても、従来と同じ租税を徴収し続けることであつた。法理論家はこれを解釈して、ファイの土地を耕作するマワーリーは、ムスリムとしてのウシユルと同時に、ファイの土地を耕作することに対してハラージュを課せられたと主張する。ムスリムの平等の原理を重んじる法理論家は、その後新たにファイの土地を入手したアラブのムスリムも、ムスリムの義務であるウシユルと同時に、ファイの土地を所有することに對してハラージュを課せられたと述べる。同一の土地にウシユルとハラージュとが同時に課せられるというのは、後世に完成したイスラム法の規定と完全に異なるが、このような理論の背後にあつた事實は、農村に留まつたマワーリーに對して、イスラムへの改宗以前とまったく同じ額の租税が課せられ続けたということにはかならない。私はこの点において、ギブ教授の結論は極めて正しいと考へる。

(四) ウマル二世はこのようにして、国庫収入の減少を招くことなく、同時にアラブであるとマワーリーであるとを問はず、ファイの土地を所有するムスリムの地主に等しい金額の租税を課することによつて、マワーリーの不満をな

だめる政策をとった。しかし実際に租税を支払っていたのは、もちろん地主ではなくて直接耕作者であり、ウマル二世の政策もマワリーの不満の根本的解決とはならなかった。また同一の土地にウシユルとハラージュとが同時に課せられるとするのは、一部の初期法理論家の主張であつたが、結局理論の透徹を尊ぶ法理論の主流となりえず、のちに完成したイスラム法において、このような規定は採用されなかった。ウマル二世は、現にアラブのムスリムの所有する土地についてはウシユルを支払うだけでよいとしたが、これは彼等の既得権を承認したものである。アラブとマワリーとの平等といつても、それはアラブの地主が今後ファイの土地を入手した場合のことであつて、決して無条件な平等を意味したのではない。ここにアラブ帝国のカリフとしての、ウマル二世の政策の限界があつた。

(五) ウマル二世の土地政策の中心的な課題は、ファイの觀念の導入にあつた。ファイの觀念というのは、サワードをはじめとする征服地の土地は、それから租税を徴収するムスリム全体の世襲財産であつて、それがムスリム全体の利益に反して、個人によつて分配されることはないという觀念である。イスラム法制史上、ファイの觀念を最初に表明したものはウマル二世の勅令であつて、後世の法理論家はこれをさらに發展させて、いわゆる国家的土地所有の理論を完成した。しかしウマル二世がファイの觀念をはじめて表明したのは、あくまで實際上の必要から出たことであつて、彼はこれによつて都市に移住したマワリーに農村の土地を放棄させ、農村に留まるマワリーから、ウシユルのほかにハラージュをも徴収することができた。もしここにファイの觀念を導入することがなければ、ムスリムの平等というイスラムの根本原理を制約することは、理論的にはまったく不可能だつたのである。当時このようなイスラムの根本原理を無視するのは普通のことであつたが、それを理論的に処理したところにウマル二世の宗教性が認め

られる。

イランの今昔

足利惇氏

私が最初にイランを訪れたのは昭和九年のこと、その年の九月から翌年の六月末日にいたる約十ヶ月間主として首都テヘランに滞在し、その間国内の主要な歴史的遺跡の見学旅行や語学研究に時を過した。今日ゾロアスター教徒の主たる居住地であるヤズドを訪問したのもその時である。第二回は京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊の一員として昭和三十九年九月から十一月末日までの三ヶ月間、これもテヘランを中心として前回に見逃した歴史的遺跡の見学とともに主として北方方言の現地調査を主眼とした。この前後三十年間の時の流れはイランの長い歴史にとつてはきわめて短い期間であるが、国内の社会情勢の変化とその対比を直接経験した私にとつてはなほだ意義あるものと考えられる。わが国がこの第二次世界大戦を境として社会秩序の上に未曾有の大変革をもたらしたことはつとに我々のよく知るところであるが、この大戦争を契機とした世界情勢の急角度の転換は、イランにおいてもその影響から免かれ得べくもなかった。

現バフラヴィ王朝治下のイラン帝国が、先帝レザ・シャーによつて前王朝カジャリエ王朝に代つて西紀千九百二十五年に創立せられたことは人の知るところであるが、私が最初にかの地を訪問した時は、帝国発足からわずかに十年足らずの年月を経たばかりで、いわば帝国建設の草創の時期であつた。皇帝がかつての国号である「ペルシア」を

「イラン」に改めたのは私の入国直前のことであるが、ことに前王朝のとき同国におけるイギリス・ロシアの勢力範圍を容認して締結した千九百七年の英露協約を破棄して眞の独立国の体面を回復した。またかつて同国における紙幣發行權を掌握していたイギリス系の「英波銀行」に代つて千九百二十七年には自国系の「国立銀行」を創設し、經濟的獨立をも獲得した。しかし、以上のような外国勢力を驅逐することは一朝一夕で完了し得るものではない。私のテヘラン在住のころは、英露の旧勢力はなお隱然たるものがあり、国内貨幣に対する信用も必しも絶対とは云い難く外貨尊重の氣風のあつたことを知つてゐる。兩院制の議會や選舉法も形式的には確立を見ていたが、いわば欧米の模倣でその運営もまだ軌道には乗らなかつた。世界的に惡路で有名であつた道路も主要道路にかぎり皇帝の命令で良くなつたと云われていたが、舗装せられたわけではなく、雨季である冬の泥濘ははなはだしく交通の杜絶も珍らしくはなかつた。テヘラン大学は千九百三十五年に創立せられ開校間もなかつたが、それは學問研究を目的とする大學というよりも初等教育の教師養成の師範大學の性格が濃厚であり、これは國民教育上緊急かつ必用でもあつた。當時の首都の景觀も、その北辺はようやく欧米風の都市の体裁を整えんとする風であつたが、南部は世界的にも有名な迷路から成る町なみであつた。

イランは先帝の偉業によつて獨立国としての政治的統一に一応成功した觀があつたが、その国内に蟠居するいくたの民族を威服する統御にまでは容易でなかつた。換言すれば、これらの民族をも含めて凡ての人々が國民として自覺しこの王朝を支持する情勢にまでは立到らなかつた。當時私は現にこれらの民族の有力な部族長乃至藩王とも見られる人と會つたが、彼らは年金を得て首都に止まり容易に帰郷を許されず、云わば軟禁状態に在つた。ことに有力な民

族の一つであるクルド族の如きは必しもこの王朝に心服していたとは考えられず、この気風は千九百四十六年のクルド共和国の樹立運動にも見られる。政治的統一とは別に大部分のイラン人の精神的統一は回教一派であるシーア派の宗教的信奉であるが、トルコ族やクルド族は回教といつてもスンニー派に属している。またユダヤ人やアルメニア人はそれぞれの宗教を持ち、小数ではあるがゾロアスター教徒も残存している。宗教を異にしたこれらの民族の政治乃至文化的統一を期待することは困難な問題として疑問の余地がない。イラン国内で大部分を占めるイラン人の文化活動はいくたの王朝の交替にかかわらず旺盛であるが、世界的詩人であるサアディやハーフェーズなどの美辞麗句は日常彼らの口ずさむところである。昭和九年十月には叙事詩「シャーフナーメ」の作者フェルドウシイの千年祭が行われ、私も国賓としてそれに参加するの栄を受けたが、彼の作詩の用語が純粹のイラン語であり、アラビア語をつとめて排している意欲は、先帝の帝国独立の意欲にもつともよく合致するものとして祭典はきわめて盛大に行われた。この国語運動はその後も一貫して引続がれ、時代によつて生れる新語もつとめてこの国粹的単語に準拠して作られた。この国の地勢を見る時、イラン高台を擁する北方のエルブルズ山系と南に横わるザグロス山系は、その間多くの谿谷があつて多くの地区を作っているが、そこに住むいくたの種族は独自の方言を持つている。イラン方言の研究は今世紀に入つて欧米学者によつて研究せられ多くの業績が発表せられている。

私は三十年以前の経験と印象とを抱いて再度のイラン入国の機会を得たが、先ず眼に入る諸事象は草創間もない往年に較べて実に感慨無量なるものがあつた。当時首都に入るためには非常に便利になつたとは云え、イラク国のバグダードから自動車で二泊三日の行程でしかも相等の強行軍であつたが、今日では道路の整備のため一日行程で容易と

なつた。テヘラン西郊のメヘラーバードには近代的な国際空港が出来ている。今日の主要道路は私の通つたレザ・シヤール時代のものとは別に直線的な舗装道路となり、一車走れば黄塵万丈に舞上るかつての光景は見るべくもない。首都の景観は全く面目一新し、近代的な高層建設は進み、欧米風のホテル、アパートメント、パンションなどこれらを利用するのに事かかない。三十年前にはややホテルらしきものはテヘランには二軒しかなく、五燭光のはだか電燈がぶら下つていたその一室を思出した。そして水道の設備である。水はテヘランの西約六十キロのカラージ河から首都に導き、エルブルズの雪解けのせいか冷たくかつ良質である。テヘランでかくもうまい水が安心して飲めるとは夢にも思われなかつたことである。かつてのテヘランの水は悪水で、ややましなのはイギリス大使館からの貰い水で、それも生水を飲むことは危険で口をすすぐのにも一たん煮沸しなければならなかつた。在留邦人で腸チブスや赤痢にかかつたものも多く、異境で命を失つた幾人かを知っている。また電燈についても同様で、三十年以前のテヘランはぼつぼつ電燈のつき始めた頃で、町の繁華街でも夜はさほど明るくはなく、家庭では専ら石油ランプを使用していたが、今日のテヘランは街燈もつき夜は明るくネオンサインなど近代都市なみである。往年では道行く人も男はパフラヴィー帽をかぶり女はチャードルという面帕のペルシア風の風俗をしていたが、今日では全く異なり、男は無帽のものも多く女は年寄り以外は欲米風の服装や化粧をなし音に聞くペルシア美人を街頭で見るのも容易である。近東一帯の商業形態であるバザールは品物についてこそ多少変化はしたが依然殷盛を極め、その外にデパートやスーパーマーケットがあり町の店舗も近代的なものが多く、かつては少しも見られなかつた正札がつけてあつた。この価額表示はイラン商人の考え方が大いに變つたことを認めさせるものであるが、バザールでは依然として掛引きの多い商行為が行われ

ている。町の交通にはドロシケという一頭馬車しかなかったが、今日では殆んど見あたらず、タクシーが雲集しているのはわが国と同じである。地方都市も程度の差はあれ、三十年前との変化はすさまじい。しかし、毎日毎日「ペルシア青」の清澄の空を仰ぎ得たのに対して首都南郊の多くの工場（大部分は煉瓦工場であるが）から吐き出す煤煙によるスモッグのせいか、今日のテヘランの空気は決して良いとは云い難い。

イランにおける近代的な学校制度とくに初等教育はこの三十年間に全国に行きわたり、それにたずさわる教官は兵役免除の恩典などで優遇せられている。大学も次第に整備せられ、とくにテヘラン大学は総合大学としてその設備の点において先進国大学に近ずきつつある。前述の如く、イランにおける諸民族が国民としての自覚を持つに到ることは容易なことではないにしても、教育の普遍化と教科内容の方針によつて次第にその目的に到るべきことを信ずる。

イランの社会における宗教的紐帯は依然として強固なるものがあるが、宗教の世界的の中に国民的精神の樹立を育成するが教育の主なる目的の一つとなつて居り、このことは教科書にも感得せられる。今日の少年少女の学校生徒のうちには、宗教とは別に倫理思想が生長されつつあることを知り、三十年來の教育成果の成功を喜ぶものである。しかし、政府の教育方針が人々に徹底するには彼らの幾世代かの年月を要すべきことは明らかであり、前途遼遠と云わねばならない。また宗教が社会的に力をもち宗教が一般人の生活や思想の基底となつている今日のイランで、客観的な科学思想の眞の意味の受容とその解決は、これからのイラン人に課せられた問題であつて、このことはまた近東以東の地域社会の共通の問題でもあり得るわけである。三十年間のイランの変化は云わば外面的な近代的变化であつて大部分のイラン人の本質的精神はさほど變つたとは思われないが、きわめて緩慢ながらもいくたの進歩的な萌芽を望

み見ることが出来たことは私の喜びであつた。

ジハード（聖戦）について

遠 峰 四 郎

マホメットの没後、イスラム国家は急速な発展膨脹を遂げ、歴大な版図を擁するに至つた。その大きな理由の一つとしてジハードを挙げることが出来る。そこでジハードの輪廓を多少なりとも明らかにしてみたいと思う。

ジハード (Jihad) はジャーハダ (Jahada) から派生した動名詞であつて、ジャーハダには「努力する、尽力する」のほかに、「誰かを相手に戦う、異教徒に対して聖戦を行う」等の意味がある。従つてジハードとは「努力、尽力」「異教徒に対する聖戦、或は単に聖戦」と言うことになるであらう。ハッドウリー (Majid Khadduri) は、ジハードの法・神学的意味は、アッラーの道の為に力を尽すことであると述べているが、この中には自己の魂の救済の為に努力するとか、信仰の為に説得するとか、或は暴力的手段に訴えることなどが含まれていると考えられる。

コーランを繙くと、イスラムの布教は、魂の救済、説得、更には戦争の遂行も敢えて辞さなくなつたことがわかる（コーラン第二章五節、第九章七四節等を参照）。心の中の悪との戦いばかりでなく、財産と生命を賭する戦いとなつていつたわけである。

ところでジハードと言うからには、正当な理由がなければならないとし、イスラム教の認めるところに従い、またアッラーの命ずるところに従い敬虔なるものでなければならなかつた。

イスラムの法理論においては、イスラム教と多神教とは現世において共存することは出来ないと言われている。現世はイスラムのものであり、しかもイスラム教徒のまだ支配していないところも、同教徒の為に取って置かれてあるのだと考えていた。かくしてジハードは、イスラム教徒と多神教徒の争いであり、イスラムの敵のみならず背教者、離反者に対しても加えられるべき制裁であると同時に、国家理性にも用いられたのである。

戦争自体は既にイスラム以前から存在していて、嘗てアラビア半島内で戦争と言えば、殆んど部族同志の争いにすぎなかつた。戦争の規則とか手続は慣習の一部として不可欠なものであり、部族または氏族が基本的政治単位であつたので、当時戦争と言つても略奪か復讐を目的とする襲撃のような形式を取つていた。

ここで重要な問題を提起する必要がある。それはジハードが部族同志の闘争からアラビア半島外の世界へ眼を転じさせたことである。もし同半島内で闘争を惹き起こす部族の巨大なエネルギーを世界を相手に団結させることが出来なかつたと仮定すれば、イスラム国家の存続は容易でなかつたに違いない。ジハードは単なる暴力と言う現象としてではなく、複雑な要因から生れたものと見る事が出来る。その要因の一つとして経済的変化が不満や不安を生み出したと主張し、それがアラビア半島外へ進出させ、豊かな土地を求めさせたのだとの解釈がある。この解釈には確かに一理がある。けれどもそれだけではイスラム教徒が、アラビア半島外で落着いてからも異教徒に対して宣言したジハードを十分説明することは出来ない。従つてイスラムにはその教えを普及し拡大すべきことを義務とする普遍的要素と軍事的にも経済的にも他国または他民族を征服して、一大国家を建設しようとする侵略的傾向があつたと言わざるを得ない。その支柱として宗教的鼓舞のみならず、アラビア半島内で古代から培われて来た好戦的戦闘的精神が

あつたと思われる。イスラムには世界的宗教としての性格を持つと共に、世界国家建設と言う二元性を備え、全世界をイスラム化しようと言う窮極的目的を持つようになり、その目的を達成する為に平和的手段を取つたこともあるし、暴力的手段に訴えたこともある。イスラムはイスラム世界内の全信徒に統一的基礎を与え、外部の世界に対して永久的戦争状態を生み出したものである。尤もそれは理論上のことであつて、実際には移り変わる情勢に応じて、ジハードに対する考え方は、積極的なものから休止状態の戦争、或は好戦的段階から文明化された段階へ移行したと考えられる。

イスラムはジハード以外の戦争を一切禁止し、宗教的目的になつた、或はアッラーの法を実施するか同法の侵犯を防ぐのが正当な戦争であるとした。

イブン・ハルドゥーン (Ibn Khaldūn, Muqaddima) によると、戦争は或る部族とその競争相手である隣接部族との間に起こるもの、敵意により起こる戦争でアラビア人、トルコ人、トルコマン人、クルド人と言つた民族の間で起こるもの、および離反者が服従を拒む者に対する王朝の戦争を挙げ、前の二つは不正、後の二つは神聖で正しい戦争であると述べている。イスラムの思想家たちは、アッラーの法と背馳するが故に世俗的戦争は避けるべきであるとしてゐる。だが一方において、人間は世俗的な戦争を容易に回避出来ないことを知つてゐた。仮に口先だけでジハードとは言つても、必ずしも神聖なる正しい戦争を行なつたとは言えず、人間の無思慮と罪がもとで社会にふりかかる不自然な現象であつたことを否定し切れなかつたらしい。イスラムの法理論上ジハードは斯くあるべしとしたところで、現実においては單なる世俗的な戦争と区別することが出来ない場合があつたことを認めざるを得ないであらう。

多神教徒に対する戦争のほかに、アル・マールワーディー (al-Mawardi, Ahkām al-Sultāniya) は、イスラム教徒に対するジハードを三つの範疇にわけ、第一に背教者に対するジハード、第二に謀反に対するジハード、そして第三にイスラムからの離反に対するジハードを挙げている。そのほかリバートとして知られている国境防備の戦争とか、或は別なタイプとして契約の民に対するジハード等もつけ加えられるであらう。

イスラム教徒はアッラーを信ずることの出来ない者と妥協することは許されていない。多神教徒はイスラムを受け入れるか、さもなければ戦争を覚悟しなければならなかった。この場合イスラム教徒は多神教徒と戦う義務が課せられていた (コーラン第九章五節、一二四節参照)。

背教者については更に二つにわけて考えることが出来る。即ちイスラム教徒がダール・ル・ハルブに加わる意図もなくイスラムに反するか、それともいま一つはイスラムを捨てた一団がダール・ル・ハルブに加わるが、彼ら自身が一つの社会を形成する地域で分立するからである。背教者が説得に応ぜずイスラムに戻ることを拒否して戦争が始まると、背教した部族の指導者は嚴罰に処せられ、大半は殺されたらしい。バラズリー (Balādhuri, Futūḥ al-Buldan) は、イスラムに戻った者は別として他の者は誰でも死をまぬがれなかったと伝えている。

謀反人に対するジハードは、意見が違い謀反を起こしてもカリフの權威だけを認める場合は、挑戦されずにイスラムの支配する世界内で居住することが認められていた。このような場合カリフは法に従うよう説得しなければならず、それでも従わなければジハードが行われた。意見の違いが信仰箇条に触れるものではなく、たとえば地方の支配者に対する不平不満の類であると、その解消に努めればよかった。謀反人に対するジハードの規則と非イスラム教徒

に對するそれとはやや異なり、謀反人の捕虜は殺されず、その財産も没収されなかつた。

脱走者と追剝とは大罪である。法学者は脱走者と追剝とはカリフによつて処罰されると言う点で一致していた。但し刑罰の程度については學者の間でも意見が違い、死刑、磔刑を命ぜよと言う者、手足の切斷を行うべしと主張する者、追放せよと言う者などがいた。そして追放については、イスラムの領土外への追放とか、イスラムの領土内にいてもよいが違反者の住んでいた土地から追放せよとか、或は投獄すべきであると主張する者たちがいた。以上のような一団と戦う場合、謀反人と同じように取扱うか、もつと寛大に取扱うかはカリフに任されていた。

聖典の民（ユダヤ教徒、キリスト教徒たち）に對するジハードは、彼らはアッラーを信じたけれども、マホメットとコーランを受け入れなかつたから罰を受けるべきであるが、その罰は一部だけでよいとされた。聖典の民はイスラムを信ずるか、信じなくても納貢するか、それとも以上の二つを拒否してジハードを挑まれるか、三者の中から一つ選ぶことが認められた。イスラムを受け入れるならば他のイスラム教徒と全く同じ市民権を享有することが出来た。もし納貢して聖典の民のままでいたければ、それでもよかつたが、市民権は完全ではなかつた。ジハードを行うとすれば多教教徒と同じ取扱ひを受けた。

リバートとは防衛を目的として港や辺境の町に駐屯することにより、イスラム世界の境界を安全に守ることである。この場合のジハードはイスラム国家が防衛的な立場にあつた時のことを指すものであらう。わけてもスペインと北アフリカのマリーキエ派の法学者は、スペインと北アフリカの国境が絶えずヨーロッパ軍の攻撃の的になつていた關係上、リバートの防衛目的を強調していた。同地方でジハードがイスラム教徒の最も根本的な義務として課せられ

たのも無理はない。

最後に戦利品について一言述べる。コーラン（第八章二節）によると、戦利品を獲得しても五分の一はアッラーのものであり使徒のものであった。そして残りの五分の四は戦闘に参加した者たちの間に分配されることになった。但し土地を初め不動産は分配されなかった。

ジハードは単なる戦争と区別され、一定の理由と手続きを必要とし、暴力の行使のみではなかった。一般にイスラムについては、「コーランか剣か」と言われているけれども、剣を振つたとしても、直ちに暴力による侵略的行為のみと片づけてしまうわけには行かない。

3 研究会（東洋文庫談話会）

昭和四十年四月二十四日 「南宋行在会子の発展」

昭和四十年五月二十二日 「韓国の字母とその音韻変遷について」

昭和四十年五月二十四日 「レニングラードの敦煌資料（壁画と写本）」

昭和四十年六月二十五日 「敦煌仏教史料」とくに禅宗関係資料について」 敦煌文献研究室 田中良昭

昭和四十年七月六日 「唐宋の藩鎮と中央財政」 ロンドン大学教授 D. Twitchett

昭和四十年七月十日 「アシヨールカ王伝説の一考察」

昭和四十年九月二十八日 「ペリオ将来の敦煌画」

研究生 草野 靖

ソウル大学副教授 崔 鶴 根

敦煌文献研究室 藤 枝 晃

敦煌文献研究室 田中良昭

ロンドン大学教授 D. Twitchett

研究生 山崎 元一

国立文化財研究所 秋山 光 和

昭和四十年十月二日 「東洋史の立場より見たヨーロッパ」

昭和四十年十月二十三日 「アメリカの中国研究」

昭和四十年十一月二十日 「東洋学のあり方について」

昭和四十年十二月二十一日 「訪古学新の族——中華人民共和国を訪れて——」 敦煌文献研究室 菊池英夫

昭和四十一年二月九日 「台湾史研究の諸問題について」 国立台湾大学図書館典藏股長 曹 永和

昭和四十一年三月十九日 「一条鞭法について」 神戸大学助教授流動研究員 岩 見 宏

4 展 示 会

第五十一回展示会 昭和四十年十一月六・七日 於東洋文庫

「イスラーム学文献および中央アジア旅行記」

昭和三十三年度より、アジア地域の社会・経済に関する総合研究を統合し、計画的に基礎資料を蒐集することを目的として、いわゆる「アジア地域総合研究」が文部省の科学研究費の別枠として発足した。その後昭和三十八年度よりは特定研究「アジア・アフリカ地域研究」となり現在におよんだが、この間、東洋文庫も「イスラーム地域の社会構造」の研究を分担し、我が国に殆ど将来されていないイスラーム圏地域刊行の現地語文献資料の蒐集にあたつた。もとより全地域にわたることは不可能であり、トルコ・アラビア・イランの三地域に重点をおいた。今回特定研究の終了をみるにあたり、過去八年間の蒐集の一端を展示した次第である。なおこれにあわせて、文庫創立以来関係者の

多大の努力によつて極めて充実している中央アジア探検に関する文献のうち、東トルキスタン探検について、探検史的な角度から十九点を選んで解説展示した。

第一部はアラビア語文献でイスラームの基本資料のなかから十五点を選んだ。選択、解説は嶋田襄平が担当した。

第二部はトルコ語文献で、共和国成立以前に編纂されオスマン朝史を中心に十九点をならべ、その選択、解説は護雅夫が担当した。なお第三部の中央アジア探検は松村潤、岡田英弘が担当した。

5 情報連絡

本年度事業は左記の通りである。

- 一、現存外国東洋学者人名辞典作成
- 二、中国考古学研究論文カード作成と整理（一九六五年）
- 三、日本についての外国語文献書誌補充カードの作成
- 四、カレンダー蒐集（外国・日本）
- 五、各種刊行物の欧文要旨の作成
- 六、各研究委員会の海外通信・連絡
- 七、来日外国人学者への便宜供与

6 図書の収集と閲覧

一、資料の収集及びサービス

選択図書カード 一、〇〇〇枚

収集図書事務用カード 一、八二〇枚

通信連絡 三〇〇件

資料購入

区分	和漢書	洋書	計
単行本	一〇三五冊	二七五冊	一三三〇冊
逐次刊行物	六八三	三三五	一〇一八
計	一七一八 (新聞一種)	六一〇	二三二八 (新聞一種)

資料交換

区分	受			贈		寄		贈
	和漢書	洋書	計	国内	国外	計		
単行本	九三〇冊	五九二冊	一五二二冊	七三冊	一六四冊	四三七冊		
逐次刊行物	二〇四四	一〇一〇	三〇五四	二二三九	一九八七	四一二六		
計	(新聞一八種) 二九七四	一六〇二	(新聞一八種) 四五七六	二二一二	二二五一	四五六三		

特別寄贈書

河口信宏氏寄贈書	一三三部	二五四冊	目録既刊
藤田本太郎氏寄贈書	七〇部	六一五冊	目録既刊
岩井大慧氏寄贈書	三一八部	六一〇冊	目録既刊
梅原末治氏寄贈書	一七〇〇部	一九〇〇冊	目録作成中
その他	一九四部	七四八冊	

製本

複写資料		洋書	和漢書
製本	製本	二五六	二九二冊
製帙	製帙	五八〇	三五五

資料複写サービス

マイクロ写真複写

申込件数

三二五件

撮影齣数

九五、六二三齣

焼付引伸枚数

六四、三三四枚

ポジフィルム

二一、〇〇〇呎

スライド

二七二齣

リファレンス

六一件

ゼロックス複写

申込件数

七三一件

枚数

三五、八七五枚

二、目録及び整理

a 洋書目録

新収増加図書 分類目録カード

九五〇部

Periodicals の調査分類カード

二〇〇部

b 和漢書目録

目録カード作成

新排架本カード

漢籍

三八四部

一、五九一枚

和書

一、五七五部

六、五〇九枚

閲覧室用分類カード

八、四九〇枚

和装本及帙題箋 七六〇枚

白地図整理

八九一枚

満洲地形図

五〇万分一

五三枚

二〇万分一

二九枚

一〇万分一

四〇三枚

五万分一

一六六枚

東亜

五〇万分一

八八枚

印度地形図

一〇〇万分一

二一枚

五〇万分一

二枚

二五万分一

六〇枚

その他

六九枚

c アジア文献目録

アジア諸語で書かれた文献の収集強化に伴い、昭和四十年四月「アジア文献整理室」が開設され、「和漢書目録室」で取扱うものを除くアジア諸語文献の整理は、総て此処に移されることになった。開設以来整理された文献は、三十三ヶ国語、約二千五百冊に及ぶ。

文献の整理方法

文献の整理は、①収書の内容が歴史、文学、宗教、言語等を中心とした比較的狭い領域のものであること。②収書内容の細分に適しないものが可成り多いこと。③仏典、無著者名図書が多いこと。④人名が不安定で、又複雑なものも多いこと。⑤系統と文字を異にする幾多の言語によつて書かれていることなどを考慮して、次の如く行つた。

1 分類

- (1) 全文献を、先ず書かれた言語で区分し、区分記号としてその言語名（英語）の頭文字を附す。

例 P (ペルシャ語)、Ma (満洲語)、Mo (蒙古語)

- (2) 次に文献をその内容で分類し、分類記号としてその分類名(英語)の頭文字を与える。

例 H (歴史)、R (宗教)、Li (文学)

- (3) 同一分類内の文献には、整理順に数字(123)を与える。

この様にしてフィルダウスイーのシャー・ナーメには P—Li 3 の請求記号が与えられた。尚 2 の分類記号の記入は将来の細分に備えて左に寄せる。

- (4) 本来同一区分内にある可き文献でも、文字の相違、形態の違い等により、別置を可とするものは、総て区分記号の右に小さい 2 を附して、別置を示す。

例 T₂ (西藏文献中の古版本)

- (5) 既に冊子目録のある満蒙部門の文献には、冊子の分類を生かして次の如く請求記号を与える。

冊子目録第一二五番の「心臓経」には、既に Mo—A—11 が与えられているので、その分類内の第三番目の本であることを示す 3 を補つて、Mo—A—11—3 とする。

2 カード

- (1) 総てユニット・カードとし、謄写印刷に附す。

- (2) 書名、著者名の順に記入する。

- (3) 字訳、音訳を排し、総て原字、原語を使用する。

d 整理

登録 和・漢・洋単行本及逐次刊行物

一、八七三部 三、四一四冊

目錄カード複製 一〇、九〇〇枚

新着書目刊行

新着図書目録 一三號 一九六五年五月刊

洋書速報（国立国会図書館刊）

二〇八號（一九六五・四・一）～二三三號（一九六六・三・一五）

三、図書の閲覧及び考査

昭和四十年年度図書閲覧状況

	開館日数	閲覧者数	一日平均	昨年同月との比	閲覧図書数	一日平均	昨年同月との比
四月	一九	一五七	八強	一四増	二、五四四	一三四弱	一、一五七増
五月	二四	二二四	九弱	二六減	二、四九八	一〇四弱	三一七減
六月	二六	二八四	一一弱	三三増	三、四九六	一三五弱	一五二増
七月	二七	四〇八	一五強	二五増	七、二三〇	二六八強	二、九四四増
八月	二六	四七三	一八強	一六増	二、三三〇	四七四弱	四、八五二増

閱覽圖書數內訳

	和書		漢書		洋書		合計	
	部数	冊数	部数	冊数	部数	冊数	部数	冊数
四月	九六	一八八	二三五	二、一九九	一二二	一五七	四五三	二、五四四
五月	一六三	二八八	二九二	一、九〇三	二一〇	三〇七	六六五	二、四九八
六月	一四四	四〇一	三五六	二、六一一	二五七	四八四	七五七	三、四九六
七月	二五〇	六二四	六六〇	六、一一〇	三二一	四九六	二、三七七	七、二三〇
八月	一六七	三三四	〇五〇	一、五七五	二九九	四三一	四、四六二	七、三三〇
九月	二八二	五一一	四三八	四、七四二	三三〇	四七七	一、〇五〇	五、七三〇

九月	十月	十一月	十二月	一月	二月	三月	計
二六	二五	二二	二二	二二	二四	二六	二八九三、
三六三	四二四	五〇一	三三六	二四二	三〇一	二九四	九九七
一四弱	一七弱	二三弱	一五強	一一	一三弱	一一強	一四弱
三二増	五一増	二八増	五二増	六七増	七三増	二三増	
五、七三〇	六、五〇八	九、一八二	六、九八九	三、四五七	四、七六三	四、〇三六	六八、七六五
二二〇弱	二六一弱	四一八弱	三一八弱	一五七強	一九九弱	一五五強	二三八強
一、五六八増	一、二六八増	三、二六五増	三、四六九増	一、三九八増	一、七八五増	二一七減	

三月	二月	一月	十二月	十一月	十月
一三八	一六九	一九四	二五四	一九四	一八六
二八八	二八九	四九三	五八三	三三九	三四〇
四八五	四六六	二九一	五四三	九四四	六一四
三、五三四	四、二二五	二、八五七	六、一二八	八、三五六	五、六八三
一〇五	二四〇	一九七	二一六	三一九	三二四
三三〇	三三三	二四四	三六二	四八七	四八五
八二七	八九五	六七二	〇二〇	四五七	一、二二四
四、〇三六	四、七六三	三、四五七	六、九八九	九、一八二	六、五〇八

考查件数

一二八二件

閲覧票発行者数

三二一名 (二二五—二五六三)

書庫内書架増設

木棚増設 新館二階、旧館三階

三三四段

スチール棚新設 新館二、三、四階、旧館二、三階

八五段

アラビア本排架

四、特別事業

東洋文庫漢籍叢書分類目録 増補之部

B 5 版 五一頁

一九六五年九月刊

漢籍叢書所在目録

B 5 版 一四二頁 一九六六年三月刊

特殊文庫マイクロフィルム目録

カード八、〇〇〇枚 編集

東洋文庫漢籍分類目録 集之部

作成中

五 研究調査活動

1 東洋学連絡委員会

財団法人東洋文庫は、戦前からの活動実績により、東洋学研究総合センターとして広範な研究者の共同利用と一般公開性具备、研究者に対する便宜供与を行い、専門分野に於ける国内的及び国際的連絡の中心としての役割を果たすことを広く期待されている。従つてその諸事業を、広く全国的組織による東洋学者の総意を反映して運営するため、昭和三十三年より、東洋学に関する主要な研究機関及び研究分野の代表者に依頼して東洋学連絡委員会を組織し、文庫の事業計画を審議し報告をうけ、助言を行うものとした。

昭和四十年度の委員会は左の如く行われた。

春期 昭和四十年五月二十五日（火）

報告 昭和三十九年度事業報告

議事 (イ)昭和四十年年度事業実行計画について

(ロ)昭和四十一年度概算要求に伴う事業計画について

秋期 昭和四十一年一月二十五日（火）

報告 昭和四十年年度事業中間報告について

議事 (イ)昭和四十一年度事業計画案について

2 特 定 研 究

課題「イスラーム諸国の社会構造の研究」

研究担当者 榎 一雄

研究協力者

荒 松雄(東京大学助教授) 岩永 博(法政大学教授) 蒲生礼一(東京外国語大学教授) 黒柳恒男(東京

外語大学助教授) 佐口 透(金沢大学助教授) 佐藤圭四郎(東北大学教授) 篠村 巖(外務省書記官) 嶋

田襄平(中央大学教授) 嶋崎 昌(中央大学教授) 土井久弥(東京外国語大学教授) 遠峰四郎(慶応義塾

大学助教授) 福島小夜子(法務省法務図書館) 藤本勝次(関西大学教授) 本田実信(北海道大学教授)

前嶋信次(慶応大学教授) 松田寿男(早稲田大学教授) 松村 潤(日本大学助教授) 三橋富治男(千葉大

学教授) 護 雅夫(東京大学助教授) 山田信夫(大阪大学助教授) 和田久徳(お茶の水女子大学助教授)

〔目的〕 イスラーム教徒は、中国および東南アジア諸国、インド、パキスタン、アフガニスタン、イラク、イラン、トルコ、シリア、アラビアおよびアフリカ諸国の一部あるいは大部分の人口を形成し、イスラーム教の教義と歴史とにもとづく共通の信仰・儀礼・制度と、それぞれの民族や国土・国家によつて相違する特殊な伝統と慣習とを持つてゐる。「イスラーム諸国の社会構造の研究」と題するこの研究は、この共通な文化と特殊な伝統とによつて編成され

ているイスラーム諸国の社会構造の性格を非イスラーム教徒の立場より理解しようとするものである。

〔研究経過の概要〕 昭和三十三年度において「アジア地域の社会経済構造に関する総合研究」が発足して以来、「イスラーム諸国の社会構造の研究」を分担して現在に至っているが、この間とくに研究部に中央アジア・イスラーム研究委員会を設け、これが研究を専攻する研究員のほかに、ひろくイスラーム圏地域の専門研究者の参加を要請して研究委員を委嘱して、その協力によつて事業を推進して来たのである。第一期の事業としては、民間の研究機関である本文庫の特徴・性格を充分に活用し、イスラーム圏地域の研究に必要な図書・資料を組織的に蒐集することにとめた。これによつて多数の研究者が自由に共同して利用し、緊密な連絡を保つて研究を進めることを意図したにはほかない。もとよりイスラーム圏地域は広大であり、そのすべてにわたつて蒐集することは不可能であり、またアジア・アフリカ地域研究に参加している他機関の蒐集も考慮し、アラビア・ペルシア・トルコの現地刊行の文献およびソ連刊行の中央アジアに関する文献を組織的に蒐集して来たのである。その他イスラーム関係の定期刊行物ならびに外国図書館所蔵の写本のマイクロ・フィルムによる蒐集にとめた。これら蒐集文献は「アジア地域総合研究文献目録1・2・3」および「アジア・アフリカ地域特定研究文献目録1・2」に収載されている。

なおこの特定研究に参加している各機関によつてA・A総合研究組織なるものが結成されているが、東洋文庫班としてはその西アジア部門を担当し、基礎的な資料・文献の組織的なサーヴェイを行つて来たが、その成果は「アジア・アフリカ文献調査報告」となつて刊行せられている。なお本年度をもつて本特定研究は一応の終了をみることになつたので、その総括的なしめくりとして、「日本におけるアジア・アフリカ研究の現状と課題」というテーマのも

とに、一九四五年以降一九六五年三月にいたるまでに発表された我が国における西アジア地域の学術研究に関する解題つき文献目録を作成刊行した。

3 機 関 研 究

課題「地方志にもとづく中国社会の研究」

研究代表者 田川孝三

研究分担者 〈地方志の書誌的調査並びに目録の作成〉 田川孝三、榎一雄、青山定雄、藤枝晃、宇都木章〔近世中国における地方的支配層の存在形態に関する研究〕 市古宙三、佐々木正哉、田中正俊、神田信夫、松村潤〔税役制度における地方的・歴史的相違に関する研究〕 佐伯富、山根幸夫、菊池英夫、草野靖、鶴見尚弘

研究経過の概要

〔研究の目的〕 中国史研究の基本史料を包含している歴代の地方志を網羅的に蒐集・整理し、これを基礎として書誌・社会・財政の三班を組織、中国社会の経済構造、および諸制度に関する基本的資料を整理し、同時にその研究をすすめる。とくに旧北京図書館所蔵の善本にして、戦後アメリカ議会図書館に移管されていた、いわゆる「LC北京善本」中に、わが国には存在しない地方志が多数存在するので、それを全部マイクロ・フィルムにしてわが国に将来することが、緊急の課題である。

〔本年度の経過〕 まず基礎作業として、LC善本のマイクロ・フィルム約三〇〇リールをアメリカ議会図書館より購

入した。その中から地方志を含むポジフィルムをネガに反転し、二〇〇点にちかい地方志をプリントすることができた。その具体的内容は、明代史研究委員会が編集した『北京善本明代地方志焼付目録Ⅰ』によつて明らかである。また、本研究に利用できる「文集」についても、地方志と同様の作業をすすめた。これらの蒐集資料は、整理が完了次第、公開して一般の研究者の利用に提供することになつてゐる。

4 総合研究

課題「宋代以降の中国農村社会経済語彙の研究」(第二年度)

研究代表者 青山定雄

研究分担者 (宋元班) 中嶋 敏 斯波義信 草野 靖 (明代班) 山根幸夫 田中正俊 鶴見尚弘 岩見 宏

(清初旗地班) 神田信夫 松村 潤 (清代班) 市古宙三 佐々木正哉 田川孝三 (総括班) 青山定雄

山根幸夫

研究経過の概要

本研究は、政書・地方志などの基本的テキストを撰定し、農村社会経済に関する歴史的地方的語彙を採録して共同で釈義をすすめる、信頼するに足る用語解を編集しようとするもので、この目的に沿うため、本年度は以下の如き作業が行われた。

宋元班 宋会要輯稿食貨計七〇部門を研究分担者に配分し、それぞれに担当部門の記事の摘要の作成と語彙の抽出

を行い、かたわら、毎月一回の研究会を開いて、摘要作成の原則や官職地名等の語彙の撰択法について検討しあつた。

明代班・清代班 初年度に作成した「明清時代社会経済語彙索引」より基本語彙を抽出し、これを研究分担者に配分、能う限り広く関係文献を渉猟して、正確な語彙解を作成することに努め、随時合して研究の促進を図つた。

清初旗地班 清初の旗地に関する語彙が多く満洲語を基とすることに特に留意し、西ドイツ・マールブルク国立図書館所蔵の満文本雍正会典（マイクロフィルム）と漢文本の康熙会典、雍正会典とを対比しつつ、実録など関係史料をも参照して、語彙の正確な釈義をすすめた。

著書 明清時代社会経済語彙索引 油印B5判 四〇頁

5 各種研究委員会

第一部 近代現代アジア研究

近代中国研究委員会

近代中国研究委員会は、昭和二十八年以来設立準備をすすめ、二十九年十一月ロッキンフェラー財団の財政的援助を得て発足、国内的にできるだけ広く異つた分野の研究者を集め政治的偏見をはなれた実証的研究を行なうとともに、

諸外国との研究上の自由な交流を促進すべく活動してきた。本年度の事業は次の如くである。

(1) 二十世紀中国とその背景に関する研究

(イ) 研究

佐々木正哉 近代中国における排外運動

山本 澄子 中国キリスト教会の自立運動

村松 裕次 瑞金、延安時代の中共の土地政策

小原 正治 中華人民共和国における土地改革と社会主義改造の研究

市古 宙三 陳 独 秀

波多野善大 近代中国における軍閥

吉田 金一 清露経済関係史

中山 八郎 台湾における反清叛乱

矢沢 利彦 フランス宣教師の中国観

(ロ) 研究者の海外派遣

矢沢 利彦 フランス 一年

(ハ) 「解放日報」索引の作成(継続)

(ニ) 資料の収集と整理

収集図書 和漢書 中国文二九四点 邦文二〇八点 漢籍一二二点 洋書 二五〇点

(2) 近代中国研究センター

本センターは、従来、わが国の東洋史研究の上で、比較的軽視されがちであつた近代中国研究の振興をはかるため、特定少数の研究者の研究を助成するのみならず、むしろ広く一般の研究者に研究上の便宜を与えることを目的として開設されたものである。本年度の事業は次の如くである。

(1) 参考用図書資料の購入整理

(ロ) 参考用図書の編集刊行

(a) 東洋文庫近代中国研究室歐文図書目録 II 一九六五年五月 B 5 四四頁

(b) 東洋文庫近代中国研究室邦文図書目録 II 一九六五年一〇月 B 5 一六五頁

(c) 東洋文庫近代中国研究室中文図書目録 II 一九六五年一月 B 5 七八頁

(d) 中国関係日本文雑誌論説記事目録 II 一九六五年六月 B 5 二四四頁

(ハ) 「近代中国研究センター彙報」第六の編集刊行 一九六五年四月 B 5 三三頁

宮下 忠雄 中国農村人民公社管見

吉田 金一 モスクワとレーニングラードの図書館管見

衛藤 藩吉 中国史学史学会に出席して

市古 宙三 近刊辛亥革命史料紹介

第二部 東アジア研究

東亜考古学

梅原末治氏の寄贈にかかる「梅原考古資料」（朝鮮之部）の受入れ整理を行い、「梅原考古資料目録 朝鮮之部」を刊行した。

古代史研究会

西周金文（両周金文辞大系）講読研究会を開き、言語・経学・考古・歴史等の諸方面からする解読研究を行っている。

敦煌文献研究委員会

敦煌文献研究委員会は、榎一雄氏の努力により昭和二十八・三十一年度文部省科学研究費交付金をうけて撮影せるブリテイッシュ・ミュージアム所蔵スタイン収集敦煌文献を始めとして、国内国外の現存西域出土古文書・古文獻の所在調査、写真撮影・収集・整理及び目録作成等を行ってその研究の推進を図り、内外における諸機関並びに研究者間の研究情報連絡、研究上必要な資料の収集・公開、複写サービス等も行ってきた。本年度の事業は左の如くである。継続事業である各国に散在する西域出土古文書の写真入手交渉に関しては、ペリオ集収敦煌文献のマイクロフィル

ムを漸次正規の交換ルートにのせる件につき、パリ側からも申入れを受けた。また藤枝晃氏の努力によって、チベットの語文献を含むペリオ本の写真一八一点を将来することに成功した。

「スタイン収集敦煌漢文文献——及び研究文献に引用紹介せられたる西域出土漢文文献——分類参考目録初稿 非仏教文献之部」の編集事業においては、本年度は「古文書類第二分冊寺院文書」及び「典籍類」の中「言語文献」の原稿を完成した。引続き「道教文献」「文学（変文）文献」の原稿を作成中である。

宋代史研究委員会

前年度からの継続事業として、「宋代名人伝記索引」の増補正と宋代史研究文献速報の編集発行を行い、文部省科学研究費・総合研究に係る「宋代以降農村社会経済語彙の研究」に従事した。

明代史研究委員会

明代史研究委員会は、文部省科学研究費（総合研究）による「宋代以降農村社会経済語彙の研究」をすすめるため神戸大学助教岩見宏氏を流動研究員として迎え、明清時代の社会経済語彙の蒐集・整理をおこなった。その準備工具として『明清時代社会経済語彙索引』（油印）を編纂した。そのほか、明初の基本史料である『御製大誥』の輪読会をもち、大誥の研究を試みている。また、毎月一回、定例研究会をもち、同じ専門分野の研究者を招いて講演をきいている。

機関研究によつてアメリカ国会図書館より購入した北京善本のフィルムよりプリントした中国地方志の目録『北平図書館善本方志焼付目録Ⅰ』（油印）を刊行した。

第三部 満蒙・朝鮮研究

清代史研究委員会

清代史研究委員会は、東アジア全域におよぶ広大な清帝国の支配について、その成立過程を中心として研究をすめ、前年度に引つづき(1)満文老檔訳注研究篇の作成、(2)満洲語辞典類の整理、(3)清代伝記資料の集成、(4)清初実録の整理、(5)清初満洲地理の研究、などを行つた。

また八旗所屬の旗人の伝記集として、清朝史研究に欠くことのできない八旗通志初集の列伝および欽定八旗通志の人物志の人名索引である『八旗通志列伝索引』（B5版 二〇六頁）を編纂刊行した。これは東方学研究委員会の補助金によるもので神田信夫・松村潤・岡田英弘が担当した。

なお昨年度に引つづき文部省総合研究「李朝時代における鮮満関係史の研究」（代表者護雅夫 東京大学）にもとづく研究をすすめ、当研究室において「李朝実録」を中心とする講読会を毎週土曜開催した。

第四部 中央アジア・イスラム・チベット研究

中央アジア・イスラム研究委員会

本年度は特定研究「イスラム諸国の社会構造の研究」についての諸事業の実施に当った。文献蒐集においては、特定研究最終年度として、従来その必用が痛感されながらも予算面からおよび得なかつたソ連刊行の中央アジア関係資料の蒐集に重点をおいた。

チベット研究委員会

チベット研究委員会は、昭和三十六年度から、ロックフェラー財団補助金によるチベットについての国際協力研究プロジェクトに参加、インドからチベット人学者三名を招聘して、「チベット人との協同によるチベットの言語・歴史・社会・文化の総合的研究」を開始したが、昭和三十九年度からは文部省補助金による特別調査研究として同研究を継続実施することとなり、さらに昭和四十年から新規事業として「チベット歴史事典の編集」を加え、今日に到った。

チベット人を迎えて五年、この間、日本人研究スタッフもチベット人も相互の言語によるコミュニケーションにだいに慣れ、両者の協同はきわめて円滑、かつ効果的におこなわれるようになった。現在ではもはやチベット人の参加は本研究の完成に不可欠の条件である。昭和四十年度における主な研究の進行状況は次のようである。

1 現代チベット語の記述的研究（文典、辞典、テキストの編集）

担当 北村甫、湯川恭敏、星実千代、ツェリン・ドゥーマ、ソナム・ギャーツォ

主としてツェリン・ドゥーマの話すラサ方言の観察・録音、分析を進めた。収集した語彙資料を服部四郎編『基礎語彙調査表』（一九五七年）に従って整理―「ラサ方言基礎語彙集」の原稿を作成、文法研究の一部を発表した。（湯川「チベット語の *duu* の意味」『言語研究』四十九号）「ラサ方言テキスト集」の編集を目標に、録音した会話、物語（「ロドウム」*ro sgrung* など）の文字化と分析を進めた。

2 古代・中世チベット史の重要文献の研究（テキストの校訂、訳註の作成）

担当 多田等観、山口瑞鳳、川崎信定、立川武蔵、二瓶幸子、ソナム・ギャーツォ、ケツン・サンボ
土観 *Thu'u bkwan* 「トゥムタ」*Grud mtha'* のうち、「ニンマ派」の章の訳稿を作成、「カギユ派」の章の研究を始めた。山口は「唐蕃会盟碑」その他の碑文、敦煌・トルキスタン出土チベット文献等、古代チベット史料の再検討を進めた。

3 歴代ダライラマ、パンチェンラマ伝記の研究

担当 多田、山口

多田は「ダライラマ十三世自伝」の研究の結果に基づいて“*The Thirteenth Dalai Lama*”（ユネスコ東アジア文化研究センター）を出版、山口は「ダライラマ六世自伝」の研究を終り原稿を作成した。

4 日本に現存するチベット文献の目録の編集

担当 北村、山口、ソナム・ギャーツォ、ケツン・サンボ

東洋文庫マイクロ・フィルム所蔵・大英博物館所蔵敦煌出土チベット文献の基礎目録カードを作成、関係チベ

ット文献との照合を進めた。東京大学所蔵・蔵外チベット文献を再調査し、その概略の目録を編集、発表した。
(北村、ソナム・ギャーツォ編『東京大学所蔵チベット文献目録』東京大学印哲研究室) ソナム・ギャーツォ将来「サキヤ全書」の欠丁調査とその補充、目録原稿の作成が終った。

5 チベット歴史事典の編集

担当 山口、ソナム・ギャーツォ、ケツン・サンボ

パリ大学のR・A・スタイン Stein 教授の指導により、東洋文庫より同教授のもとに派遣された山口により編集が準備されてきたが、昭和三十七年七月、イタリアで開催された国際チベット学会議において各国チベット研究センターからも資料が提供されることになり、昭和三十九年度までに約一万の項目が選定され、記載事項が整理された。主担当者山口の帰国にともない、昭和四十年より本研究の一部として編集を継続することになった。昭和四十年度には、新たに「パンチェンラマ一世自伝」「パンチェンラマ二世自伝」等から項目を補充、記載事項全般にわたって再検討した。事典編集に関連して、山口は、チベットの暦の研究に従ってきたが、研究の一端を発表した。(第十三回日本西蔵学会大会・研究発表会)

以上の諸研究を進めるかたわら、研究スタッフのチベット文語読解力の向上をはかり、ソナム・ギャーツォの指導により、次のテキストの講読会を毎週一回ずつ開いた。

The Council for Tibetan Education : "Primary School Reader, 1~5." Dharmasala, 1962~1963.
Damdinsuren (ed.) : "Tibetan and Mongolian Tales of Vetalas." Ulan Bator, 1964.

なお、チベット人協力者は、東洋文庫において研究に従事したほか、東京大学、東京外国語大学、大正大学、立正大学、名古屋大学などのチベット語の講義に、講師として、あるいはインフォーマントとして参加し、これらの大学をはじめ、京都大学、大谷大学などのチベット研究者のチベット研究に協力した。また、チベット人協力者の媒介により、インド、シッキム、ブータンなどから入手困難なチベット古文獻を収集することが可能になり、それらの地域において新たに出版されるチベット語文獻も直ちに入手できるようになった。

第五部 南アジア・インド研究

毎週金曜日「琉球歴代宝案」の講読研究会を開いている。

6 研究者養成

従来、わが国においては、東南アジア・チベット・インド・イスラム圏及び中央アジア・満蒙など特殊な言語・文字の修得を前提とする研究分野は、基礎的な資料の収集も充分でなく、その研究の持つ意義の重要性にもかかわらず甚だ立ち遅れていた。東洋文庫は、戦前よりこれら諸地域の現地語資料の収集につとめ、また之等特殊分野の次代を担う専門研究者を養成するために研究生の制度を設けていたが、戦後に到り特にこうした未開拓分野の振興を目的として、文部省の補助を得、研究者養成制度が復活された。更に右の特殊分野以外についても、ハーヴァード・エンチン研究所よりの援助金を得て大学院博士課程修了程度の人材に引続き数年間の研究の機会を与え、後継研究者の養成

が行われてきた。文部省及びハーヴァード・エンチン研究所補助金等による本年度の研究生は左記の通りである。

チベット研究

山口瑞鳳

「チベット歴史辞典の編輯及びチベット暦、第六代ダライラマ伝記の研究」

インド研究

山崎元一

「インド古代史の研究」

中国研究

明清史 鶴見尚弘

「明清社会経済史の研究」

近代史 宮坂 宏

「近代中国法制史の研究」

宋代史 草野 靖

「通貨問題より見たる宋代財政史の研究」

7 研究生報告概要

アショーカ王伝説の研究

山崎 元 一

インド古代史研究のための文献はきわめて豊富なのであるが、これらの文献のほとんどが宗教思想関係のものであり、歴史事実を客観的に記した作品は全くないと言つてよい。このような文献を史料として歴史研究を行う際には、先ず諸文献の性格を明らかにし、その中から史実を抽出する操作が必要となる。インドに最初に統一国家を実現させたマウリヤ王朝の時代は、暗黒ともいえるインド古代史の中にあつて唯一の例外的時代である。特に第三代のアショーカ王の時代は、所謂「アショーカ王刻文」によつて当時の現実をある程度知りうるため、古代史研究の出発点となつてゐる。アショーカ王はまた仏教の保護者として仏教徒の間に広く知られてゐる。仏教徒は王に関する伝説を数多く伝えてきたが、これらの伝説は信者の教化という目的にそつて伝えられたため、史実は粉飾され誇張されて、後世

に創作され付加され 物語と区別がつかなくなつてしまつてゐる。しかし、アジア各地に伝わるアシヨーカー王の伝説を相互に比較検討し、またアシヨーカー王刻文と伝説を対照してみるによつて、同伝説が時代的・地方的・部派的な影響を受けて変化してきた跡をたどることが出来る。こうした史料操作は、多かれ少なかれインド古代の文献を読む際に常に為されねばならぬものである。私はアジア各地に伝わる数系統のアシヨーカー王伝説が如何に形成されてきたかという問題をテーマとし、古代文献の成立の一過程と、仏教発達の一面とを明らかにしたいと思つてゐる。なお、アシヨーカー王伝説の研究とは別に、インド古代の社会経済的現実についても若干研究を進めようと思つてゐる。特にヴァイシヤ・シュードラという範疇に加えられている下層民衆、あるいはダーサと呼ばれる奴隷階級の生産活動に占める役割りを追求したい。

嘉興府の嵌田問題について

鶴見 尚弘

中国における前近代社会の特質を究明する上で、中国社会の土地制度を総合的に理解することは、われわれに課せられた、もつとも重要かつ緊急な課題である。しかしながら、それにも拘わらず、地方文書の不足、断片的類型的記述にもとづく史料的制約によつて、土地制度の解明は実証的にも理論的な展望においても、今日なお不充分であるといわなければならない。このような研究史の上に立つて、明清時代における土地制度の具体像をあきらかにするため基礎的研究の一つとして、明末清初、嘉興府を中心とした嵌田問題を素材として、土地制度の地域的研究を試みようとした。すなわち、宣徳四年嘉興県から分割して、新たに秀水・嘉善の両県が独立せしめられたが、土地の肥瘠か

ら嘉善県の税額がもつとも重く、嘉興県が最も軽かった。しかしながら嘉靖二十七年に嘉興府下で扒平の法が行われ税額を一県一則としたが、いぜんとして原籍納税原則がとられたから、附郭県で郷紳・富戸が多く、別県に嵌田を多くもつ嘉興・秀水県と、郷鎮で郷紳・富戸が少く、他県の嵌田が多く存在する嘉善県との間で、税制上の対立が表面化した。嵌田問題を解決するため、多くの議がなされたが、これらは何れも土地問題と関係するものであり、嵌田問題の全貌をあきらかにすることによつて、土地制度に関するそれぞれの個別的な具体的事実を明確にし、これらを総合することによつて、明清土地制度の一端をあきらかにするための実証的作業を試みた。

中国近代法制史の研究

宮 坂 宏

一、伝統的な専制支配体制を維持してきた中国社会——清王朝——が、西欧諸国の東洋進出によつて、王朝国家体制の崩壊と植民地化の危機にみまわれたとき、社会の諸相においてさまざまな反応を示した。その一が西欧諸国の近代的な法制度を継受して、専制支配体制を君主立憲体制へ変革しようとする動きであつた。これは西欧資本主義の侵略を受けた前資本主義社会体制を固執する支配者層が、これに対抗しようとする姿勢の一である。ところで、この国家体制の改革の経過を、法制の整備の面から明らかにして行くことは、中国社会の近代社会化ということの意味を明らかにしてくれる一つの手懸りである。また、中国社会における近代法典の継受とは如何なる意味をもっていたのかを考察する。清末の法制改革には、すでに明治維新によつて近代化への転換を行なっていた日本から、諸立法を継承することをはかつたため、日本人法律家が多くこれに参加している。それらの事実を明らかにすることも一つの作業と

なるう。これについては岡田朝太郎の刑法典編纂等に果たした役割については考察を試みておいた。

二、中国社会の専制支配体制の基盤となつてゐるのが、地方自治組織——「村」であるといわれている。そこで、この村落の構造と、これに対する専制支配体制下の地方行政組織との關聯を問題にし、その支配の原理と歴史的な変容を明らかにすることを試みている。この場合、否定せられるものにこそ旧い様相が示されるものと考えられるので、新しい地方行政組織の原理を作りあげてくる現象も考察の範囲にとり入れられてくる。そこで、三つの時期、(1)清朝時代の地方自治組織、(2)中華民国の地方行政組織とその理論、(3)中国共産党の政權下の地方行政組織、に分つてこの研究を進めて行く。目下、第三の時期について資料の蒐集検討をいそいでいる。

宋代紙幣問題の研究

草野 靖

輕齋銀と紙幣との關係——南宋政府の紙幣の流通を支えていたのは、茶塩の専売や軍糧の買付けなどの政府の財政機構に乗つて、米塩の産地と畿内の要州・大軍屯駐地とを往來する商人層であり、紙幣はこれ等商人達の価値の輸送手段として、また取引の支払手段として盛用されていた。従つて紙幣は、機能的にみると、所謂輕齋物貨と競い合う關係にあつた。輕齋物貨とは、文字どおり携帯に輕便なもので、金・銀・絹帛や見錢関子などの手形、或は政府出売の官告・綾紙・度牒・紫衣・師号まで指称されているが、南宋時代最も良く使用されたのは銀であり、逆に輕齋と云えば銀を指すようになっていた。そしてこの輕齋銀もまた商人の価値輸送手段として、政府の財物運送手段として、広く使用されていた。

そこで紙幣と銀との関係が問題になるが、市中に於ける紙幣と銀との優劣関係は、この両者の何れが良く輕齎としての条件にかなうかに依つて決まっていた。即ち輕齎は単に携帯に便利なばかりでなく、必要に応じて容易に銅錢に變易出来るもの——つまり、出發地に於ける銅錢から輕齎への変易、目的地に於ける輕齎から銅錢への変易が容易に出来るもので、且つまたこの變易の際、地域的季節的な市価の相違から来る元価の損失（所謂折閱）が少ないものであることを要件としたが、銀価は地域に依つて差があるため、紙幣の流通が健全なときには、折閱が少なく携帯にもより便利で、また政策上沿路の商税を免除されていた紙幣に対する需要が大きく、銀の流通は却つて低調であり、紙幣が発行過剰になつて流通が不安定になると、矢張りそれ自体素材価値のある銀の需要が増大していった。

また財政運営についてみると、南宋時代、一般に不通水路州軍の銅錢税収は、当州軍の官司が輕齎銀に變易して起發しており、特に広南福建路の州軍は総べて輕齎銀起發地に指定されていた。紙幣が発行されると、江浙路の不通水路州軍の税は銀会中半起發に改められたが、福建路は紙幣の流通が普及した嘉定初年まで全銀起發が続けられ、広南路は南宋末期まで紙幣の流通を見なかつた。そして政府に収納された銀は、和衆や官俸・兵俸・賞賜に使用されていたが銀価は起發地に於いて高く、使用地で低廉であり、政府の財政的損失が避けられなかつた。またこの損失を少なくするため、銀両の収支に省価（公定価格）が設けられ、且つこれが固定されると、起發地では所定の銀額を揃える為め担税戸に不当な負担（上供銀錢の追徴）が加えられ、使用地では、銀を受領する商人將兵等が、省価と市価のひらきから損失を蒙つていた。

結局価格の折閱が銀の盛用を妨げる大きな要因となつていたことが知られるが、この点から推せば、宋元明と時代

を降るにつれて銀の流通が盛んになつていった裏には、市中に於ける両替金融組織が整備され、折衝問題が解決されたことがあつたものと見なければならぬだろう。その意味で、北宋王安石の市易新法以来普及をみた金銀抵当庫、輕齎銀の上供について活躍する金銀鋪戸、紙幣の両替についてあらわれる卓子鋪、或は寄附鋪などが検討されねばならない。

8 職員の研究業績

青 山 定 雄

〔論 文〕「宋代における華北官僚の婚姻關係」(中央大学八十周年紀念論文集)

「宋代における華北官僚の系譜について、その二」(聖心女子大学論叢第二五集)

〔書評紹介〕「対校十三史食貨志について」(書報六八)

宇 都 木 章

〔論 文〕「西周諸侯系図試論」(「中国古代史研究」第二)

岩 生 成 一

〔著 書〕『鎖国』(昭四一年三月 中央公論社)

〔論 文〕「平戸イギリス商館文書を通して見た初期歌舞伎の一面について」(石田博士頌寿記念東洋史論叢

昭四〇年八月)

〔註〕 アビラ・ヒロン『日本王国記』（昭四〇年九月、岩波書店）

榎 一雄

〔論 文〕 「鄯善の都城の位置とその移動について（一）・（二）」（オリエンツ、第七卷一号、一九六五年四月、一四頁。同第七卷二号、一九六五年六月、四三—八〇頁）

「楼蘭の位置を示す二つのカロシユティール文書について」（石田博士頌寿記念東洋史論叢、一九六五年八月一〇七—一二五頁）

「チャイニーズロリポデトリについて」（学燈、六二ノ一二、一九六五年十一月、七六—七八頁）

On the so-called Sino-Kharosthi Coins, East and West, New Series, Vol. 15, Nos. 3—4,

Sept. - December, 1965, pp. 231—276.

The Location of the Capital of Lou-lan and the Date of Kharosthi Inscriptions, Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, No. 22 (for 1963), pp. 125—171.

〔動 向〕 「東洋史総説（後半は菊池英夫氏執筆）」（史学雑誌、第七四編五号、一九六五年五月、一八二—一八六頁）

〔雑 記〕 「十年一昔」（埼玉教育、十八ノ十二、一九六五年十二月、三四—三七頁）

岡田 英弘

〔編 書〕 「八旗通志列伝索引」（神田信夫・松村潤と共編）

〔論 文〕 「ダヤン・ハガンの年代」 (東洋学報第四十八卷三・四号)

〔書評紹介〕 アサラクチ・ネレト・テウケ——新出の一蒙文年代記 (東洋学報第四十八卷二号)

神田 信夫

〔編 書〕 『八旗通志列伝索引』 (東洋文庫滿文老檔研究会 一九六五年二月 B5版 二〇六頁)

〔論 文〕 「『滿文老檔』に見える毛文竜等の書簡について」 (『朝鮮学報』三七・八輯 一九六六年一月 四

三九—四五八頁)

〔講 演〕 「日本における滿洲史研究史」 (第二回若手アルタイ学、中央アジア研究者集会 一九六五年七月一

三日)

「清太宗の大清国成立過程」 (史学会第六十四回大会東洋史部会、要旨「史学雑誌」第七四編第一二
号 一九六六年一二月 九五—九六頁)

〔報 告〕 「欧米現存の滿洲語文献」 (『東洋学報』四八卷二号 一九六五年九月 七〇—九五頁)

〔雜 記〕 「湖南先生と滿文老檔」 (高橋克三編『湖南博士と伍一大人』一九六五年一二月 五三—五五頁)

菊池 英夫

〔講 演〕 「中国における現段階の階級闘争と歴史学界」 (一九六五年六月五日、於「現代中国学会関東部会シ

ンポジウム」報告)

「中国を旅行して——各地の博物館と太湖周辺の旧地主庄園——」 (一九六六年一月二九日 於第三

七五回東洋史談話会)

「中国の封建制理論」(一九六六年二月二三日、於近代史研究会)

「廖仲愷と第一次国共合作」(一九六六年二月二六日、於中国研究所 孫文生誕百周年記念講座「中国革命史上の人物—孫文から毛沢東へ」第二回)

〔学界動向〕 「歴史学(一九六五年度)」(「新中国年鑑」一九六六年版 極東書店)

王賡武著「五代北シナにおける権力の構造」(Wang Gungwu, The Structure of Power in North

China during the Five Dynasties, Univ. of Malaya press, 1963) (「東洋学報」第四十八卷

第一号)

賀昌群著「漢唐間封建土地所有制形式研究」(「東洋学報」第四十八卷第二号)

外山軍治著「顔真卿—剛直の生涯—」(「史学雑誌」第七十四編第二号)

佐々木正哉編「鴉片戦争の研究・資料篇」「鴉片戦争後の中英抗争・資料篇稿」(「史学雑誌」第七十四編第四号)

十四編第四号)

服部克彦著「北魏洛陽の社会と文化」(「史学雑誌」第七十四編第七号)

F. J. M. Rhoads「中国紅軍参考書目」(「史学雑誌」第七十四編第七号)

周藤吉之著「唐宋社会経済史研究」(「史学雑誌」第七十四編第十号)

宮崎市定著「アジア史研究・第四」(「史学雑誌」第七十四編第十号)

吳晗著、佐久間重男・小林文男訳編「新中国の人間観——歴史人物を中心として——」(「史学雑誌」

第七十四編第十二号)

石田博士古稀記念事業会編「石田博士頌寿記念東洋史論叢」(「史学雑誌」第七十五編第二号)

莊為斯編「唐律疏議索引」戴炎輝著「唐律通論」「唐律各論」(「史学雑誌」第七十五編第三号)

傅儀「我が半生」上(「日本と中国」一九六五年)

〔翻 訳〕 趙有福・黎凱「四史の編集・執筆・研究の重要な意義」(「アジア経済旬報」六一八号、一九六五年

七月下旬号)

陳智超「中国歴史の前途に対する孫文の重要な予見」(「アジア経済旬報」六二〇号、一九六五年八

月中旬号)

〔雑 記〕 「中国の歴史博物館(一)」(「東洋学報」第四十八卷第四号彙報)

「毎月の歴史」(日中友好協会機関紙「日本と中国」連載)

草 野 靖

〔講 演〕 「南宋行在会子の発展」(四月二十四日東洋文庫談話会)

〔書 評〕 ハートウェル著「中国経済史資料(六一八—一三六八)の手引」(東洋学報四八卷一号)

佐 伯 富

〔論 文〕 「清代養廉銀の予借について」(東方学三〇 昭四〇、七)

「清代同治朝における郷勇の撤廃問題」(朝鮮学報三七・三八輯 昭四一、一)
「清朝の興起と山西商人」(社会文化史学一 昭四一、三)

末松保和

〔著書〕「青丘史草第一」(四十年四月)

〔論文〕「李朝の野史の叢書について」(学習院大学文学部研究年報第十二輯)

〔講演〕「攷事撮要とその冊板目録」(朝鮮大学校にて四〇年七月)

立花孝全

〔論文〕「大悲の考察——Bhāvanākramaを中心として——」(印度学仏教学研究第十三卷二号 一九六五年三月)

「Kamalaśīla と法成との関係——Hphags pa sa lu lian pañi rgya cher ngrel pa 』大乘
稲竿経随聽疏』を中心に——」(印度学仏教学研究第十四卷二号 一九六六年三月)

〔講演〕「チベットの仏教受容過程におけるカマラシーラのブハーバナークラマの意義」(第二八回東京大学
印度哲学印度文学研究室例会 一九六五年三月)

辻直四郎

〔論文〕「アドブタ・ブラーフマナについて」(鈴木学術財団研究年報一)

〔講演〕「古代インドの占術」(東洋文庫春秋講座)

「インド古典、ヴェーダ」(NHK古典講座)

〔書 評〕 前田恵学「原始仏教聖典の成立史研究」(鈴木学術財団研究年報1)

C. G. Kashikar : The Śrauta, Pāṇinīya and Pāṇinīya Sūtras of Bharaḍvāja. Poona 1964. (東洋学報四十八卷一号)

R. Göbl : Die drei Versionen der Kaniska-Inschrift von Surkh Kotal. Wien. 1965 (東洋学報四十八卷四号)

鳥 海 靖

〔論 文〕 「雑誌『政論』における政党組織の構想」(東京大学教養学部人文科学科紀要第三十六輯「歴史学研究報告」第十二集「歴史と文化」VIII 昭和四十年十月 七九～九八頁)

〔概 説〕 「近代の日本」(井上光貞編「日本史入門」昭和四十一年三月 有斐閣 岩井忠熊・高村直助氏と分担執筆 一六五～一八八頁、一九九～二二九頁)

〔研究報告〕 「小川文書中の対華和平工作史料について」(昭和四十一年三月二十二日 小川文書研究会)

〔書 評〕 升味準之輔「日本政党史論」第一卷(図書新聞 第八四四号 昭和四十一年二月五日)

〔評論〕 「文献から見た『東亜百年戦争』」(「中央公論」昭和四十年九月号 一九八～二二二頁 伊藤隆・宇野俊一・松沢哲成氏と共同執筆)

中 嶋 敏

〔編書〕「対校十三史食貨志」

藤枝 晃

〔論文〕The Tunhuang Manuscripts. — A general description. Part 1 (Zinbun No. 9) 1916年3月.
pp. 1—32.

〔講演〕「レニングラードの敦煌資料」(四〇年五月二四日、於東洋文庫談話会)

「フランスの古城」(四〇年七月三日、於史学研究会例会)

「征服王朝の再検討」(四〇年十一月八日、内陸アジア史学会大会)

〔評論雑誌〕「歐洲の博物館をめぐる」(四—(五)日本美術工藝、三一九号—三二七号、四十年四月—十二月)

「レニングラードの東洋学アルヒーフ」(圖書一九七号、四一年一月)

「スタイン・コレクションの『層』」(圖書一九九号、四一年三月)

「日本的展観法に一言」(読売新聞、四〇年十月七日)

松村 潤

〔著書〕『八旗通志列伝索引』(昭和四十年十二月 東洋文庫滿文老檔研究会)

〔編書〕『日本におけるアジア・アフリカ研究の現状と課題——文献目録・解題——西アジア』(一九六六年)

三月 アジア・アフリカ総合研究組織)

〔学界動向・報告〕史学雑誌「回顧と展望」中央アジア 七四編第五号(昭和四〇年五月)

三根谷 徹

〔論文〕「韻鏡と越南漢字音」(「言語研究」第四十八号 一三—二二頁、一九六五年二月三〇日)

宮坂 宏

〔論文〕「陝甘寧辺区政權の成立」(早稲田法学会誌第十五卷(三月末日))

「中華ソビエトおよび辺区時期の婚姻法の特質」(福島正夫教授と共同執筆)(仁井田博士記念論集 第二卷(印刷中))

〔編訳書〕「中華ソビエト・中国解放区婚姻法資料」(プリント版 九月五日)

〔学会報告〕「中華ソビエトおよび解放区時期の婚姻法について」(法制史学会東京部会 十二月十八日)

〔書評〕仁井田陞「東アジア諸国の『固有法』と『継受法』」(思想四六三号、法制史研究第十五号 十月十日)

〔翻訳〕「陝甘寧辺区参議會通過条例集(二)」(早稲田大学比較法学第一卷第二号 三月末日)

森岡 康

〔論文〕「許博の疏文と贖還批判(上)」(朝鮮學報第三十七・三十八合併特輯号 四十一年一月)

〔講演〕「大君陣」(第十六回朝鮮學大会一九六五、一〇、一〇 於天理大学)

山崎 元一

〔論文〕「マヒンダ伝説考」(東洋學報 四八一—二)

〔講演〕「アショーカ王伝説の一考察」(東洋文庫談話会)

〔学界動向〕 「古代インド奴隸制研究の現段階」 (史学雑誌 七四―八)

山根 幸夫

〔編 書〕 『皇明制書』上卷 (古典研究会、一九六六年一月、B五判 五一七頁)

〔書評紹介〕 「皇明制書の諸版本について」 (『大安』一二卷二号 一九六六年二月 一〇―一二頁)

※職員の業績 昭和三十九年度補遺

関野 雄

〔論 文〕 「貨幣からみた中国古代の生活」 (『風俗』四卷三号、一一―一二頁、昭和三十九年二月)

「刀銭考」 (『東洋文化研究所紀要』三五冊、一七―七五頁、昭和四〇年二月)

〔動 向〕 「考古学界の展望」 (文科系学会連合編集『研究論文集』一五卷、八九―九三頁、昭和四〇年三月)

〔講 演〕 「李愐の経済政策をめぐって」 (東大東洋文化研究所研究発表、昭和三十九年六月)

附一

東洋文
庫附置

ユネスコ東アジア文化研究センター

(The Centre for East Asian Cultural Studies)

ユネスコ東アジア文化研究センターは、東洋文庫の情報連絡機関としての機能に基づき、ユネスコの要望によつて、昭和三十六年七月一日東洋文庫の附置機関として設立された。

ユネスコは一九五七年以来、向う十年間の継続事業として「東西文化価値の相互理解に関する重要事業計画」(The major project on the mutual appreciation of Eastern and Western cultural values)を推進しているが、

この目的遂行に恒久的に貢献する施設 (associated institutions) として、まず一九六一―六二年度に東アジア(ビルマ以東)各国の研究機関の連絡網の中心となるべきセンターの設立が計画された。同じ趣旨による同様の施設がベイルート、ダマスカス、テヘラン、ニューデリー等のアジア各地にも設置されつつある。日本ユネスコ国内委員会は、これに呼応して、人文科学・社会科学の両分野に亘る東アジア地域の総合的文化研究を促進し、その成果を世界に紹介し、アジアに対する正しい理解を増進させるため、このセンターを東京に設置することとし、従来とも東洋学に関する国際的情報連絡機関としての役割をも果たしてきた東洋文庫に、これを附置することとなつた。

一 目 的

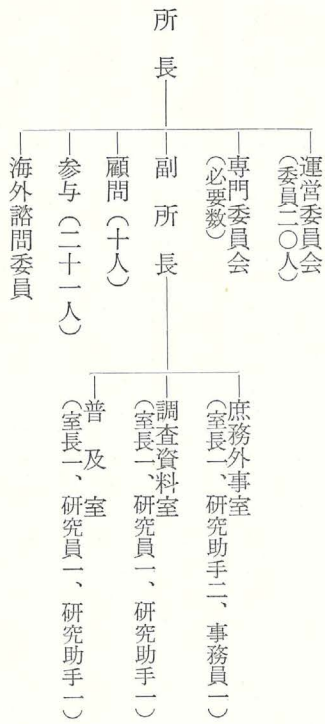
東アジア各国に於ける研究機関と連絡して東アジア(ビルマ以東)地域の各国に於ける東アジア文化に関する研究

(人文科学・社会科学)の情報・連絡を緊密にすると共に、その研究を促進し、且つ成果の普及を計る、いわばクリ
アリング・ハウスとしての機能を發揮することを目的とする。

二 経 費

当センターの経費は政府補助金及びユネスコ援助金によつて賄われる。

三 機 構



四 役員及所員

所長
運営委員

辻直四郎

福原匡彦

中村元

福井康順

松本信広

小口偉一

一又正雄

岡野澄

岩村忍

竹内理三

田中一松

東畑精一

服部四郎

前田陽一

山本達郎

吉川幸次郎（一名欠員）

岩生成一

尾高邦雄

森鹿三

有泉亨

顧問

朝吹三吉

小島祐馬

高垣寅次郎（一名欠員）

参与

青山秀夫

岩淵悦太郎

海後宗臣

鈴木俊

伊大知良太郎

時枝誠記

大浜信泉

久松潜一

石田幹之助

長尾雅人

丸山真男

宮本正尊

水野清一

金田一京助

鈴木大拙

石田英一郎

織田武雄

殿木圭一

平塚益徳

田村実造

原田淑人

宮沢俊義

岩井大慧

仁井田陞

宮崎市定

三上次男

渡辺進

所員

副所長 榎 一雄

所員 生田 滋 岩崎 富久男 大塚 祐子

菊池 英夫 (昭和四十一年三月退職、山梨大学助教授、兼任研究員) 外池 明江

田中 時彦 (昭和四十一年三月退職、東海大学講師、兼任研究員) 土肥 祐子

直井 靖夫 三井 昌子 (昭和四十一年三月退職)

平野 豊 (東洋文庫総務部参事兼務)

五 運 営

運営委員会 (委員二〇名) は事業の運営に関する事項を審議する。

顧問会議 (顧問一〇名) は所長の諮問に応じ、事業について助言する。

六 事 業

センターの行なう事業の主なるものは左の如くである。

1 国際的協力による調査研究

2 内外研究機関との連絡および情報資料の交換

- 3 東アジア文化研究に関する資料の調査蒐集および交換
- 4 上記の諸事業、諸情報を速報する「東アジア文化研究」(センター機関誌、季刊)の刊行
- 5 東アジア文化研究に関する諸資料の刊行
 - (イ) 内外研究機関及び研究者一覧
 - (ロ) 各種の文献目録類
- 6 東アジア文化の研究成果の普及
 - (イ) 研究書・概説書の出版
 - (ロ) 非専門読者対象の読物「東アジア文化研究叢書」の編集刊行
- 7 東アジア文化に関する、東アジア地域外(主としてヨーロッパ)に保存されている史料の調査
- 8 内外学者の研究に対する便宜供与
- 9 フェローシップの企画および斡旋
- 10 研究会・講習会の開催
- 11 国際会議・シンポジウムの開催
- 12 その他センターの目的達成に必要な事業

* 刊行物はすべて英文である。

七 昭和四十年事業概況

1 運営委員会及び顧問会議

一、運営委員会

第一回 〔日 時〕 昭和四十年十月十九日（火）

〔出席者〕 八名

〔議題〕 一 昭和三十九年度事業報告

二 委員の改選

三 顧問の推薦

四 昭和四十年事業経過報告

五 一九六五～六六年度ユネスコ本部よりの補助金について

第二回 〔日 時〕 昭和四十一年三月二十二日（火）

〔出席者〕 十四名

〔議題〕 一 第六回東西諮問委員会報告

二 昭和四十年事業経過報告

三 昭和四十一年度事業計画概要

二、顧問会

〔日時〕 昭和三十九年十月十九日（火）

〔出席者〕 一名

〔議題〕 一 顧問の改選

二 昭和三十八年度事業報告

三 昭和四十年事業計画案

四 一九六四～六五年度ユネスコ本部よりの補助金について

五 所長の改選について

II 調査研究

一、調査研究 A

〔課題〕 「東アジア諸国における社会的成層と社会的移動に関する国際協力調査」

Cross-national research on social stratification and social mobility in Asian countries.

このプロジェクトは昭和三十六年度に、ユネスコの承認を得て、その正規事業として、昭和四十一年度までの六年計画の事業として発足した。本年度はその第五年目に当り、最終年度に当る昭和四十一年度に行なう予定の实地調査のため、ユネスコ・フェローシップを受領して二名の委員をタイとフィリピンに派遣し予備調査を行なった。

二、調査研究 B

〔課題〕 「東アジア諸国における西洋文明の受容の歴史的背景に関する国際協力調査」

International research on the historical background of East Asian Countries' acceptance of western civilization.

このプロジェクトは昭和三十七年度にユネスコ正規事業としての承認を得て、昭和四十一年度までの五カ年計画の事業として発足した。

本年度はその第四年目に当り、四十一年度開催予定のシンポジウムの準備をすすめた。同時にユネスコ・フェローシップを受領して中華民国立台湾大学図書館典藏股長曹永和民を招聘し、研修に従事させた。

当プロジェクトの拡充に伴い、調査研究に必要な図書資料を購入した。

本年度において専門委員会は一回開催した。

III 連絡及び情報交換

一、内外研究機関及び研究者一覧（英文）の作成

本年度は東洋文化の研究に従事している研究者その他の関係者の便に供するために、アジア各国の研究機関ならびに研究者についての調査を昨年度に引続き行ない、そのうち収集をほぼ完了したフィリッピン関係資料に基き「フィリッピンにおける東アジア研究の研究機関および研究者一覧」を編集し、これを刊行した。

二、季刊「東アジア文化研究」（英文）の刊行

本年度は全分冊を合本し、四十一年三月に刊行した。

三、文献抄録の作成

本年度は、昨年編集した「東アジア研究に関する文献目録の目録（欧米編）」（英文）を刊行した。

四、地域外資料目録の作成

本年度は前年度に引続き東アジア研究にとって不可欠のヨーロッパ資料の調査のため、ユネスコ古文書研修生として、欧米に派遣されていた当センター職員 生田研究員が撮影したポルトガル・アジユダ古文書館に保存されている東アジア関係資料のマイクロフィルムを整理し、かつ国内現存の東アジア関係資料のマイクロを補充した。

五、図書資料の購入

当センターの連絡情報交換の大幅の拡充とそれに基づく上記諸事業の出版編集のため、これに関する図書資料を収集した。

IV 出版物の作成

一、研究書概説書の翻訳・出版

前年度翻訳を完成したチャデン・フラッド訳「ラーマ四世年代記」第二巻をセンター刊行物として本年度出版した。

The Dynastic Chronicles, Bangkok Era, The Fourth Reign (B.E. 2394—2411 (A. D. 1851—1861)),

tr. by Chadin Flood. Vol. II, Text, xix, 290 pp.

また、本年度において翻訳を行い、来年度出版の計画である「ラーマ四世年代記」第三巻は、その英訳を完了した。

二、非専門読者対象の読物出版

「東アジア文化研究叢書」(英文)として明年度に刊行予定の下記の図書を編集した。

Nguyen Khac-Kham : Vietnamese Culture and Vietnamese Studies.

A. Tagore : Left-wing Literary Debates in Modern China.

Chen Ching-ho : Chinese abroad in the Philippines in the Sixteenth Century.

V シンポジウム・研究会講習会等の開催

一、研究会

本年度は左記の研究会を行った。

曹永知「台湾史研究の諸問題について」

昭和四十一年二月二六日 於東洋文庫

二、講習会

本年度はビルマ語の講習会を東洋文庫において行つた。

〔期間〕 昭和四十年八月二日～八月三十一日

〔出席者〕 十四名

〔講師〕 西 義郎、コロ・ン他

VI 便宜供与

センター事業活動に伴い、来日外人研究者に対する便宜供与は年々著しく増大した。その主要なものは左記の通りである。

Prof. Rong Syamananda

Deputy Rector and Dean of the Faculty of Arts, Chulalongkorn University

Prof. M. L. Chirayu Navawangse

Head, Department of Thai Language, Faculty of Arts, Chulalongkorn University

Mme. Madeleine Devits

President, Brussels Teacher College

Mr. Eugene Wu

Director, Harvard-Yenching Library

Dr. David O. D. Wurful

International Christian University

Fr. Yves Raguin, S. J.

“Loyola” Jesuit Residence

Miss Josefa M. Saniei

Associate Professor, Institute of Asian Studies, University of the Philippines

Fr. Lue K. W. Yüan, S. J.

“Loyola” Jesuit Residence

Mr. Lothar G. Knauth
Dr. Frank Lynch, S. J.

Dr. Chen Ching-Ho

Prof. Prachoom Chomchai

Dr. Maria Cid Peralta

Dr. Estefania Aldaba-Lim

Prof. S. P. Olivier

Miss Marina G. Dayrit

Mr. Wu Chi-hua

Mr. Ts'ao Yung-ho

Prof. Meribeth Cameron

Mlle Danielle Poisle

Prof. Abdul Karim Yafi

Department of History, Harvard University
Director, Institute of Philippine Culture, Ateneo de Manila
University

Senior Lecturer, Chinese University of Hong Kong
Associate Professor, Chulalongkorn University

Dean, Graduate School, The Philippine Women's University
Director, Institute of Human Relations, The Philippine Women's University

Rector, University College, Durban

University Librarian, University of the Philippines
Institute of History and Philology, Academia Sinica

Chief, Division of Collection Keeping, National Taiwan University Library

Academic Dean, Mount Holyoke College

Pensionnaire de la Maison franco-japonaise

Professor of Sociology, University of Damascus

Mr. Abdul Hadi Hachem

Deputy Secretary-General, Ministry of Culture, Republic of
Syria

Prof. Liang Chia-pin

Professor of Diplomatic History, National Chenchi University
Supervisor in History, Secondary Education Department,

Miss Chusiri Chamoraman

Ministry of Education, Thailand

附(二) 東洋學術協會

評議員	石田 幹之助	市古 宙三	岩井 大慧	岩生 成一	梅原 末治
	榎 一雄	河野 六郎	白鳥 清	末松 保和	辻直 四郎
原田 淑人	三上 次男	山本 達郎			

編集担当者

宇都木 章	榎 一雄	神田 信夫	菊池 英夫	北村 甫
佐々木 正哉	田中 正俊	松村 潤	護 雅夫	山口 瑞鳳
山根 幸夫				
幹 事 白川 邦子				

東洋學報第四十八卷第一号—四号目次

第四十八卷第一号(昭和四〇年六月)

清議と郷論.....	越智 重明
突厥の啓民可汗の上表文の文章—読「突厥碑文劄記」(二).....	護 雅夫
一八九三年福建惠安県教案資料.....	佐々木 正哉
郭明昆著 中国の家族制度及び言語.....	江頭 広

王賡武著 五代北シナにおける権力の構造	菊池英夫
ソビエトにおける敦煌研究文献三種―メンシコフ氏の近作―	金岡照光
ハートウエル著 中国経済史資料(六一八―一三六八)の手引	草野靖
カミンズ編訳 修道士ナヴァレットの世界周遊記	佐々木正哉
カーシカル出版・翻訳 バラドヴァー ज्याのシュラウタ、バイトリメーディカ、	
パリシエーシャ・ストトラ	辻直四郎
長沢和俊著 チベット―極東アジアの歴史と文化	山口瑞鳳
北京大学中国語言文学系語言研究室編 漢語方言詞滙	藤堂明保
第二回「若手アルタイ学、中央アジア研究者集会」	山田信夫
第四十八卷第二号	
東洋的古代(上)	宮崎市定
マヒンダ伝説考	山崎元一
欧米現存の満州語文献	神田信夫
賀昌群著 漢唐間封建土地所有制形式研究	菊池英夫
シエルクスマ著 <i>itsod pa</i> ―チベットに於ける僧院の議論	山口瑞鳳
シャンバ撰(パリンライ編)アサラクチ・ネレト・テウケ―新出の一蒙文年代記	岡田英弘

林屋永吉、野々山ミナコ、長南実、増田義郎訳注　コロンブス・アメリゴ・ガマ・バルボア・

マゼラン航海の記録（大航海時代叢書Ⅰ）

チョーラ朝期タミル語の四刻文

第四十八卷第三号

ダヤン・ハガンの年代（上）

袁世凱の總統就任

東洋の古代（下）

太平天国東王楊秀清の誥諭一篇

エンダコット著　初期香港関係人物略伝

坂野正高著　中国と西洋（一八五八—一八六〇）——総理衙門の創設・徐中約著　中国の国際

関係（一八五八—一八八〇）・蒙思明著　総理衙門の組織と機能

韓国史学会編　申奭鎬博士華甲記念朝鮮時代研究特輯

アンワル・カン著　イギリス・ロシア・中央アジア——一八五七—一八七八年の外交

トルコ言語協会編　言語における「純粹化の限界」

第四十八卷第四号

南宋における義役の設立とその運営——特に義役田について——

生田

辛島

岡田英弘

藤岡喜久男

宮崎市定

佐々木正哉

佐々木正哉

明石陽至

宮原兔一

佐口透

護雅夫

周藤吉之

ダヤン・ハガンの年代(下)	岡田英弘
宇陀水銀をめぐる古代史上の諸問題	松田寿男
プーリーブランド著 古代中国語の子音組織	河野六郎
王毓銓著 明代的軍屯	岩見宏
呉相湘著 宋教仁―中国民主憲政的先駆	菊池貴晴
ギブ著 イスラム文明の研究	佐藤次高
ゲーベル著 スルフ・コタル出土カニ・シュカ碑文の三原文	辻直四郎
中国の歴史博物館 (-)	菊池英夫

昭和四十一年十二月二十一日印刷
昭和四十一年十二月二十六日發行

〔非売品〕

報年庫文洋東法人團財

東京都文京区本駒込二丁目二八番二一號
發行者 榎 一 雄

東京都文京区白山二丁目十二番五號
印刷所 創 文 社

東京都文京区本駒込二丁目二八番二一號

電話 (942) 〇 一 二 一

發行所 財團 東 洋 文 庫
法人

(振替 東京 六七〇二三番)

